PLANET PYRAMID

2000年後のピラミッド | 柴川敏之展

未来の王様は誰だ!?

SHIBAKAWA Toshiyuki

PLANET PYRAMID

SHIBAKAWA Toshiyuki

2000年後のピラミッド｜柴川敏之展

人類のお宝を探る時間旅行へようこそ。
——— 柴川敏之

Welcome to time travel to explore
the treasures of citizenry.
——— SHIBAKAWA Toshiyuki

柴川敏之展

SHIBAKAWA Toshiyuki Exhibition

2000年後のピラミッド

PLANET PYRAMID

日時｜2014年12月23日（火・祝）—
2015年2月15日（日）
会場｜九州芸文館
主催｜ちくごアートファーム計画実行委員会
共催｜西日本新聞社、九州芸文館美術展実行委員会
助成｜公益財団法人福岡文化財団
企画｜花田伸一（キュレーター）

文化庁「平成26年度 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」

目次

0007　ごあいさつ――未来の王様は誰だ!?
0008　世界遺産としての「2000年後のピラミッド」｜柴川敏之

0013　プロジェクト概要
0014　『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』について
0015　『ちくごアートファーム計画』について
0016　九州芸文館について
0017　筑後エリアについて
0018　『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』ができるまで
0019　タイムドキュメント
0020　展示配置図

0023　会場風景
0024　2000年後の考古学者の間
0028　2000年後の化石の間
0042　2000年後のお宝の間
0064　2000年後の闇の間
0070　2000年後の黄金の間
0084　2000年後の食の間――カフェレストラン ななつ星
0090　**地域連携プログラム**
0091　サテライト展示1――近松岩吉商店 室岡店
0092　サテライト展示2――赤坂飴本舗
0093　サテライト展示3――うなぎの寝床
0094　コラボレーション企画――福岡県立美術館
0095　同時期開催展――北九州市立美術館

0097　関連イベント
0099　**トークイベント**
0099　クロストーク「八女の古墳群と芸術文化」
0100　アーティストトーク「2000年後のピラミッドへようこそ!」
0100　学芸員による「2000年後のピラミッドトーク～未来の王様は誰だ!?」
0101　ギャラリートーク1「41世紀と21世紀の考古学者によるトーク」
0102　ギャラリートーク2「みんなのお宝トーク～ 2000年後のお宝」
0103　**参加型イベント**
0103　プレ・ワークショップ1「2000年後の筑後を発掘しよう!」
0104　プレ・ワークショップ2「2000年後の筑後を発掘しよう!」
0105　ワークショップ「2000年後の化石を作ろう!」
0106　ミニ・ワークショップ「2000年後の絵手紙☆プロジェクト～ 2000年後の人へ絵手紙を送ろう!」
0107　参加型イベント「2000年後の王様プロジェクト～王様気分で展覧会を見よう!」

0108　テキスト、資料
0109　2000年後から見る福岡県立美術館 コレクション＆展覧会の総括｜西本匡伸
0110　現代美術の世界観と考古学の関係性｜大塚恵治
0111　ちくごのピラミッドに迷い込んで｜臼井敬太郎
0112　古墳で現代アート｜宮本初音
0113　美味しいストーリーにはご用心｜鬼本佳代子
0114　時を渡る舟 ――「PLANET PYRAMID」の時空間｜中村共子
0115　風景をつくる画家｜山下里加

0116　2000年後の権力と芸術の狂宴｜花田伸一

0122　出品目録
0126　柴川敏之に関する資料
0130　『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』の活動記録
0134　謝辞

ごあいさつ ――未来の王様は誰だ!?

このたび九州芸文館では、古代文化を擁する福岡県筑後エリアの風土性をふまえ、「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに制作活動を行う美術家・柴川敏之（1966-）の展覧会を開催いたしました。隈研吾設計による九州芸文館を「2000年後のピラミッド」に見立て、2000年後に発掘された携帯電話やパソコン等の化石作品のほか、地域の皆さんと共にワークショップで制作した作品、地域のお宝、皆さんのお宝等も交えながら展示していきました。

太古の古墳やピラミッドは権力と美とが分かちがたく結びついて生まれた人類最初の結晶ともいえるでしょう。その背景には数多くの名も無き民による労働がありました。翻って私たちの社会の権力と美はどのようなものでしょうか、また2000年後にはどうあるべきでしょうか。私たちの日常が化石化した2000年後の世界。現代が凝縮した未来のピラミッドの中で人類のお宝を探る時間旅行を楽しみながら、権力と美の源泉に触れていただきたく思います。

本展は九州芸文館を拠点に福岡県筑後エリアの地域資源に注目しながら地域の皆さんと一緒に展覧会を作り上げるプロジェクト『ちくごアートファーム計画～筑後の風土と芸術文化』の一環として開催いたしました。2014年6月のキックオフ・シンポジウム『筑後の大地と創造力』に始まり、8月、10月にクロストークを重ね、地域資源を掘り起こしながら展覧会の準備を進めてまいりました。本展を通じて筑後エリアの魅力を再発見していただければ幸いです。

最後に本展の開催にあたりご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げます。

世界遺産としての「2000年後のピラミッド」
柴川敏之

『41世紀からのメッセージ｜美術の時間 vol.6 柴川敏之展』（デビットホール、1999年、キュレーション：柳沢秀行）

草戸千軒町遺跡の発掘調査風景（第29次調査区、1980年撮影、写真提供：広島県立歴史博物館）

2000年後の41世紀、私たちの地球や現代社会はどうなっているだろうか。もしかすると世界各地の遺跡のように発掘されているかもしれない。私は「2000年後の未来から見た現代社会」をテーマに制作活動を続けている。きっかけは、2つの遺跡との出会いである。ひとつは、約2000年前に火山の噴火により一瞬にして街ごと姿を消した、イタリアのポンペイ遺跡[*1]。もうひとつは、私が17年間暮らした広島県福山市で出会った、草戸千軒町遺跡[*2]である。かつて「日本のポンペイ」と呼ばれたこの遺跡は、鎌倉・室町時代に栄え、約300年前に大洪水で川に沈んでしまった[*3]幻の集落である。どちらの遺跡からも、当時の人々の暮らしや文化が生き生きと存在していた様子が想像できる。しかし、現代と変わらぬ人々の営みがあったにも関わらず、突如消失し、やがて忘れられてしまっていた。そのことに大きな衝撃を受けた。

それ以前、私は広島市に住んでいた。大学時代は学内の被爆建物[*4]をモチーフに油彩画を制作していたが、卒業後、草戸千軒町遺跡との出会い（1993年）から、「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに石板状の絵画作品[*5]の制作を始めた。その後はこの作品と大量の耐火レンガや建築現場の足場を組み合わせ、「2000年後の発掘現場」を想定したインスタレーション作品へと展開し、近年はそこから出土した化石（出土品）タイプの作品を絵画技法（p.24参照）で制作している。

2013年の11月、私は下見のために初めて九州芸文館を訪れた。九州新幹線に乗り、筑後船小屋駅に降りると、黄土色の広大な芝生の中に複数の三角形で構成された不思議な建物〜九州芸文館がそびえ立っていた。それを見た時、1995年に旅したエジプトを思い出した。この九州芸文館は、まさに砂漠の中に屹立する「未来のピラミッド」というのが、私の第一印象であった。

このプロジェクトでは、まず古墳の専門家の大塚恵治氏とのクロストーク（p.99参照）において、上述した私自身の体験や今までの作品を市民の皆さんや実行委員のメンバーと共有した。トークの中で大塚氏からこの地域にあるたくさんの装飾古墳等について伺い、エジプトのピラミッドとの共通点等を考えながらイメージを膨らませていった。その後、筑後地域を探索する中で、様々な方々や地域資源との出会いをヒントにしながら展示構成を考えていった。リサーチ前、筑後地域に関して私が想起するものは、青木繁と坂本繁二郎、八女茶ぐらいであったが、リサーチを始めると、聞き覚えのあるものや、初めて知るものが次々現れた。そのどれもに興味をそそられ、多様性と豊かさに驚かされた。また、リサーチ中、2つのことを思い出した。広島市での展示の際（1994年）に八女市の仏壇店が作品購入したこと。そして、イタリア留学中にアトリエ訪問（1997年）した彫刻家の豊福知徳氏も久留米市出身だったこと。どちらも本展でのコラボレーション展示に繋がり、改めてこの地へのご縁を感じた。

筑後地方は、まず何よりも気候風土に恵まれ、食文化が豊かである。改めて自分の生活を見れば、共同購入している美味しい野菜や、様々な日常的食品の産地も筑後地方のものがとても多いことに気づいた。また、多数の古墳群と装飾品が示すように、古墳時代から繁栄し、人々が暮らしを営み、文明を形成してきたことが分かる。江戸時代に入ると八女では石灯籠、和紙、仏壇等が作られ、産地として有名であることからも、特色ある伝統工芸も脈々と受け継がれてきたことが見て取れる。明治時代以降、青木繁や坂本繁二郎など日本を代表する洋画家を輩出したことからも、文化面においても豊かな才能を育む風土があったと言えよう。こうした筑後地方の歴史を見れば、「ひと」の発展と豊かな暮らしは、その豊かな自然環境によって支えられてきたことが証明されよう。しかし、いつしか我々は科学万能主義に陥り、自然を支配し、利益を引き出すようになり、結果として皮肉なことに、豊かな自然を抱いている地方都市は、経済的生産性・効率性の低さ故に「ひと」が離れ、コミュニティの存続の危機に瀕している。筑後地方も例外でなく、今は少子高齢化・過疎化に悩む。

そうした状況を鑑み、本プロジェクトは、筑後地方の文化の豊かさを市民と一緒に発掘し、意識し、存続させていこうとする試みであるという。上述したような課題に向き合う地方都市、人々の想いと、そこに現代のピラミッド〜九州芸文館が出現したことの化学反応を見込んだプロジェクトとしたことに賛同した。そして、筑後地方の文化・歴史と現在の状況を知る過程で、様々なアイデアが浮かび、九州芸文館を「2000年後のピラミッド」に見立て、展示と複数のイベントから構成することになった。中でも柱となったのは次の3つであろう。

九州芸文館と2000年後の招き猫の化石（2000年後のピラミッドとスフィンクス）

赤色の装飾古墳：童男山（どうなおさん）古墳石室内の石屋形

「2000年後の化石の間」に設置したPLANET SHIP（2000年後の船の化石）

1：市民参加型展覧会

企画当初からクロストーク等を通じて市民の皆さんとアイデアを出し合いながら進めていった。九州芸文館と近隣の特別支援学校の2カ所で2000年後の筑後地域を発掘するワークショップを行い、現代における筑後の再発見を試みた。他にも市民参加型のトークやワークショップを行った。また、この地域に住む方々の家に眠る金色のトロフィーや金色のオブジェを募り展示につなげた。

2：建築物からの構想〜三角形、金・赤

隈研吾氏の設計による九州芸文館は、様々な三角形を基本として外観や展示室などが構成されている。「2000年後の黄金の間」では、エジプトのピラミッドからヒントを得て市民の皆さんから集めた金色のトロフィーを墓に見立て、民主主義の墓として提示し、この建築を読み解きながら展示を行った。また、この地域の赤い装飾古墳からヒントを得て、ワークショップで制作した赤色の拓本で壁面を覆った。

3：筑後の地域資源と自作とのコラボレーション展示

「2000年後のお宝の間」では、2000年後のお宝として、筑後の豊富な地域資源を掘り起こし、未来の視点から光を当てた展示とした。また「2000年後の化石の間」では、この地方の船の中に自作を敷き詰め、船底を2000年後の街にも見立ててこの地域・国家・地球をひとつの船として表現し、今後の行く末を問う作品とした。

リサーチを重ね、こうした構想を考えている最中、私事ではあるが、この展覧会を約1ヶ月半後に控えた日（2014年11月1日）に第一子を授かった。孫のような歳の差であるが、かけがえのない命が、丸裸で産まれてくる瞬間に立ち会えた。この出来事が今回の展示に少なからず影響している。例えば、「2000年後の化石の間」の中の船に立つキューピー人形の化石（出土品）は、この不安定で先の見えない現代社会をこれから生きようとする意思と不安に満ちた息子の姿と重なった。また、船の中に敷き詰められた様々なオブジェは、これから生きる上で必要となるであろう品々でもあり、一人の人間が生涯にどれだけのモノを所有し、死と共に手放して行くのかを想像した。そして、それらを纏ってどこへ向かって進むのかを想像する。

一方、息子の誕生を喜んだのも束の間、展示の直前にギックリ腰になり、車イスでの展示作業やイベントとなった。本展キュレーターの花田伸一氏をはじめ多くの皆さんにご迷惑をおかけしたが、筑後の皆さんの温かい言葉に励まされ、様々な場面で本当によく助けていただき、期せずして筑後の皆さんとより深く関われたことは嬉しい誤算であった。このように私の人生にとっても特に思い出に残るプロジェクトとなった。この場を借りて感謝の意を伝えたい。

「2000年後」をテーマにしてから早くも20年以上になる。その間、日本は阪神淡路大震災、東日本大震災等の大災害、福島の原発事故など大きな危機に直面し、世界においてはNYの同時多発テロ以降、各地で紛争が勃発するなど、我々を震撼させる数々の出来事が起きている。我々の経済活動が引き金となっている可能性のある気候変動と、それに伴う自然環境破壊・自然災害など、現代社会は、複雑かつ予測不可能な危機に直面している。ポンペイが繁栄していた古代と比較し、物質的には豊かで発展しているように見える現代は、グローバル化が加速する中で、もはやポンペイの時代よりも突如消失される危険性がはるかに高いと言えるだろう。2000年後の41世紀には、我々の文明が存続している可能性の方が低いのではないかとさえ思う。

今回のプロジェクトで岡山と筑後を何度も行き来する中、この地域と九州芸文館に未来の社会を思い描いた。民主主義の衰退が叫ばれる今日、2000年後に真の民主主義は実現し、持続しているのか。それとも、いつか民主主義は葬られ、過去の遺産として発掘されるのか。そもそも民主主義とは何か。市民とは誰か…。不安と疑問は尽きない。しかし、それと同時に期待と願いもある。九州芸文館は、筑後の豊かな自然や文化を背景に、多様な人々が集う新しい可能性を秘めた場所である。もし2000年後にここが遺跡として発掘されたとしたら、様々な現代の品々や筑後ゆかりの品々の化石（出土品）が出土するだろう。ひょっとすると、ここが社会的課題を協働的に解決した起点となり、民主主義のモニュメントとして保存されているかもしれない。41世紀、人々が世界中だけでなく宇宙からも訪れる、未来の世界遺産「2000年後のピラミッド」となっていて欲しいと願っている。

*1　ナポリ近郊に位置し、西暦79年のヴェスヴィオ火山の大噴火によって地中に埋もれた古代都市の遺跡。1748年に再発見され、発掘調査が始まった。筆者は1997年にイタリアに滞在（文部省在外研究員）し、フレスコ画と並行してポンペイ遺跡の調査研究を行った。

*2　鎌倉時代から室町時代頃に存在したとされる集落の遺跡。芦田川の中州で発見され、1961年から1994年まで発掘調査が実施された。出土品は広島県立歴史博物館に常設展示され、2004年には国の重要文化財に指定された。筆者が1993年に福山市に移住した頃、最後の発掘調査が行われていた。

*3　現在の研究では約500年前（室町時代後半）に衰退し、その後水没したという説が有力。

*4　広島大学在学中の同東雲キャンパスの図書館で、入学当初から毎日見て過ごした建物。この建物は、爆心地より4.11kmにあり、1941年に講堂として建てられ、2006年に取り壊された。柴川はこの建物をモチーフとして、現代社会への不安や孤独を「地我像（じがぞう）」として描いていた。

*5　2000年後に現代のモノが化石化したイメージを表現した。フレスコ画やテンペラ画の影響を受け、ミクストメディア技法で制作した半立体状の絵画作品。身近なモノ（蚊取り線香、車のエンブレム等）を埋め込んだ変形パネルを支持体（厚みは約5cm）とし、身近な素材（石、砂、耐火煉瓦等）を顔料とした手作りの絵具を使って制作した。

プロジェクト概要 | Project Outline

『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』について

福岡県では筑後エリアの芸術文化交流施設、九州芸文館を拠点に2014年度より３年計画のアート・プロジェクト『ちくごアートファーム計画』に取り組みはじめた。現代アートを通じて筑後エリアの地域資源を再発見しながら、地域の人材交流および人材育成を図るものである。その初年度プログラムとして後述のとおり公開シンポジウム、連続クロストークを開催し、そこでの成果は市民参加型展覧会『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』という形で結実した。

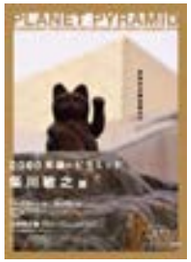
本展では岩戸山古墳に代表される筑後エリアの古代文化に着目し、2000年後の未来から現代社会を見つめなおすべく化石をテーマに制作を続ける美術家・柴川敏之（1966年生／岡山市在住）を招聘した。柴川の見立てにより、独特なデザインの九州芸文館の建築空間が『2000年後のピラミッド』に見立てられ、筑後エリアの地域資源も積極的に取り入れながら展示構成がなされた。その結果、洋の東西を超えて古代文化が交錯する場、そして時代の壁を超え、古代から2000年後まで種々の時間が交錯する場が生み出された。

市民参加型展覧会の準備にあたっては、福岡県の県民文化スポーツ課を事務局とし、おなじく福岡県の社会教育課および福岡県立美術館、そして九州芸文館の立地する福岡県筑後市の商工観光課、同市教育委員会の社会教育課、岩戸山古墳を擁する福岡県八女市の観光振興課、同市教育委員会の文化課、筑後商工会議所、九州芸文館の指定管理者であるNPO法人芸術の森デザイン会議および「ちくごJR芸術の郷」事業団によって構成される実行委員会が組織された。

本展の実現にあたっては同委員会のネットワークを通じ、岩戸山歴史資料館、近松岩吉商店、福岡県立筑後特別支援学校、八女民俗資料館、八女伝統工芸館、香蘭女子短期大学、赤坂飴本舗、うなぎの寝床、羽犬塚商店街協同組合、福岡県立八女工業高等学校、CRAZY AUTO 等各方面の協力を得た。

市民参加型展覧会：７つの市民参加

1. プレイベント（クロストーク）で地域のお宝や拓本の材料を市民と協議！
2. 「黄金の間」の壁画を特別支援学校の生徒さんや市民の皆さんと制作！
3. 「黄金の間」のトロフィー＆オブジェを大募集。会期中も続々と増殖！
4. 市民による「2000年後の絵手紙」が会期中、増殖！
5. 香蘭女子短期大学ファッション学科の学生さんが特別関連衣装を制作！
6. 会期中、サテライト展として筑後地区の複数箇所に柴川作品を展示！
7. そしてピラミッドの核心部分で明らかになる、７つ目の市民参加の形とは!?



本展のポスター・フライヤー
本展の広報物や配布物は、本展のコンセプトやメッセージを表したキャッチコピーを盛り込んでデザイ ンされている。
（デザイン：白水高広）

『ちくごアートファーム計画』について

九州芸文館を拠点に筑後エリアの地域資源に注目しながら「筑後の風土と芸術文化」を考え、実践していくためのアート・プロジェクト。

皮切りとして、キックオフ・シンポジウムを実施。「里山」「自然」「食」等筑後エリアに豊富にある地域資源に目を向け、これらが芸術文化を育む肥沃な土壌たりうることを示すべく、藻谷浩介氏による基調講演、筑後地域で活躍する産業・文化関係者を交えたパネルディスカッションを行った。

連続クロストーク第1回では“過去”をテーマに大塚恵治氏が筑後地域に拡がる八女古墳群を紹介、柴川敏之は自身の作品背景である現代への危機意識を語った。

第２回は“現在”がテーマ。白水高広氏は自身が営むアンテナショップの取り組み等を紹介、牛島智子氏は我々の身近にある蝋燭を例に、視点を変えることで真逆の価値となる、ものの価値の曖昧さを語った。

第３回では“未来”をテーマに、牛島光太郎氏が個々人の日常の記憶をテーマに続ける制作活動を紹介。梅木隆氏は宅老所の活動を通し、人から人へと伝わっていく記憶について語った。

2014年６月29日（日）
- シンポジウム：『筑後の大地と創造力』
- 基調講演：「里山資本主義における芸術文化」
  藻谷浩介（地域エコノミスト/日本総合研究所調査部主席研究員）
- パネルディスカッション：「筑後の大地と創造力」
  藻谷浩介×小森耕太（「山村塾」事務局長）×平川武（「九州ちくご元気計画」［筑後地域雇用創造協議会］実践支援員）×津留誠一（彫刻家/九州芸文館館長）

2014年８月30日（土）
- 連続クロストーク『ちくごアートひろば』：第1回「八女の古墳群と芸術文化」
  柴川敏之（美術家）×大塚恵治（八女市教育委員会文化課）

2014年10月18日（土）
- 連続クロストーク『ちくごアートひろば』：第２回「筑後の地域資源とアート」
  牛島智子（美術家）×白水高広（うなぎの寝床代表）

2014年12月23日（火・祝）
- 連続クロストーク『ちくごアートひろば』：第３回「地域の記憶を紡ぎだす」
  牛島光太郎（美術家）×梅木隆（美術家/宅老所はるさん家代表）

2014年12月23日（火・祝）–2015年２月23日（日）
- 市民参加型展覧会：『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』
  柴川敏之（美術家）

『ちくごアートファーム計画』フライヤー
（デザイン：白水高広）

藻谷浩介氏基調講演「里山資本主義における芸術文化」

ちくごアートファーム計画：
2014年度／筑後の風土と芸術文化
→『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』
2015年度／筑後の環境と身体性
→『カラダに効くアート』
＜牛嶋均・牛島智子・坂井存展＞
2016年度／筑後の自然と創造力
→『アートで地球と遊ぶ　木村崇人展』

九州芸文館について

九州芸文館は、「豊かさを体感できる公園」とのメインテーマで整備された福岡県南部の筑後広域公園内に2013年4月に開館した。自然環境を包み込むように整備された広大な敷地のほぼ中央に位置し、美術展や音楽会等の文化事業開催、地域の人たちのための様々な講座開設や貸しスペース運営等、芸術文化を通した交流や情報発信の新たな拠点として機能している。

建物は、日本を代表する建築家の一人である隈研吾氏の設計協力で、向きや高さ、材料の異なる大小の三角形のフォルムの組み合わせは、勾配のついた小さな屋根が寄り集まっているような外観を構成し、周囲の風景や山並みとの調和を保っている。また、建物中央の広い中庭は、建物と周囲の環境との一体感を生み、緑豊かな公園との連続性を意識した開放的な意匠となっている。

九州芸文館の模型。上は九州新幹線の筑後船小屋駅。右が博多方面、左が鹿児島方面。

筑後船小屋駅に停車する九州新幹線つばめ

九州芸文館の年表（福岡県主催による主な自主企画展）

1989年　筑後広域公園整備計画スタート
2011年　3月：全国初公園内の駅として九州新幹線筑後船小屋駅開業
2013年　4月：九州芸文館開館
　　4月：『開館記念 福岡県立美術館コレクション展
　　はじまりはここから』
2014年　1月：『没後30年 田崎廣助 ―巨匠、八女よりいづる―』
　　4月：『福岡県立美術館コレクション展
　　うつろうかたち とけあうことば ―作家の目に映る世界―』

黄土色の芝生で覆われた2月の九州芸文館

九州芸文館のエントランス広場

筑後エリアについて

筑後エリアは福岡県南部を占める地域で、久留米市、八女市、柳川市、筑後市、大牟田市等を含む。エリアの中央東側には耳納山地が連なり、南端の県境には筑肥山地がそびえる。耳納山地を挟み東西に筑後川と矢部川が流れる。二つの河は阿蘇の源流から豊かな養分を運んで平野へ下り、有明海にそそぐ。こうした豊かな自然環境は、古くから人々の暮らしを育んできた。

古くは縄文時代から人の定住が見られ、古代には有力な豪族がクニを築いた。八女の丘陵には八女古墳群とよばれる約300基の多種多様な古墳が群集しており、その繁栄を今に伝える。その中の一つ、岩戸山古墳は、6世紀頃朝鮮半島の新羅と手を組みヤマト王権軍に戦いを挑んだ筑紫君磐井の墓であり、阿蘇溶結凝灰岩で人や動物をかたどった石人石馬等が数多く出土している。

7世紀頃までに筑紫国は分裂し、筑後国が成立した。戦国時代には大友氏の幕下で「筑後十五城」と呼ばれる領主たちがそれぞれに城を築き実質的な統治を行った。その後、豊臣秀吉による統合を経て、江戸時代には久留米藩、柳河藩、三池藩の三藩がこの地を治めた。

河川に恵まれた筑後地域では水運業が発達し、舟の往来によって物資が運ばれたため、川沿いには職人たちが集い、ものづくりが盛んに行われた。特に八女では、手すき和紙の八女和紙、それを用いた八女提灯、阿蘇溶結凝灰岩を用いた石灯篭、福島仏壇等の手工業品が生み出された。これらの手工業は江戸時代には産業としての基盤が作られ、今日まで受け継がれている。

そのほかにも、箱雛や燈籠人形等、八女には庶民の暮らしの中に有形・無形の文化が残っている。八女福島の燈籠人形は、江戸時代の中頃から約270年にわたり庶民の手で営まれてきた民俗芸能のひとつ。毎年秋、巨大な三層構造のからくり人形舞台が福島八幡宮の境内に組まれ、囃子にあわせて華やかなからくり人形芝居が上演される。箱雛は、箱の中に人形を納めた独特の形の雛飾りである。町人の贅沢が禁じられた江戸時代、豪商たちが隠れて楽しむために作られたといわれている。八女以外の地域では久留米市の籃胎漆や久留米絣、筑後市の赤坂人形等がある。赤坂人形は職人の余技として作られた品で、素朴な温かみのある玩具や土産物として親しまれている。このように筑後エリアには豊かな自然環境とそれに根ざして育まれた様々な文化が長い時間をかけて堆積し今に息づいている。

福岡県の筑後地域

筑紫平野を貫流する筑後川（久留米市付近から下流を望む）
提供：国土交通省筑後川河川事務所

八女の町並み

岩戸山古墳と石人石馬（レプリカ）

『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』ができるまで

クロストーク（レクチャー・ミーティング）

大塚氏による八女の古墳群の紹介と柴川による作家活動等のプレゼンテーション。その後、会場から本展へのアイデアや意見を募り共有した。

筑後地域のリサーチ

筑後地域の施設や商店を訪問し、本展への協力依頼、柴川作品と共に展示する筑後の特産品や商品、サテライト展示等についてリサーチした。

筑後地域ゆかりのモノ選び（福岡県立美術館、岩戸山歴史資料館、八女伝統工芸館、羽犬塚商店街他）

福岡県立美術館からは、筑後地域ゆかりの画家や彫刻家の作品を借用した。この作品は、髙島野十郎の《洋梨とブドウ》。

岩戸山歴史資料館では、大塚氏と共に筑後地域の考古資料を選び、展示のために借用した。これは岩戸山古墳から出土した石人の頭部。

金色のトロフィー・オブジェの募集

市民参加型展覧会として、筑後地域の皆さんが所有する金色のトロフィーや金色のオブジェを2000個を目標に募集した。

プレ・ワークショップ（ローラー拓本）

筑後地域の皆さんと共に、2000年後の世界を発掘する体験をし、本展に展示するための赤い拓本を制作した。（計2回）

タイムドキュメント｜活動記録 参照（pp.130–131）

＊（於：～）がないものは、九州芸文館で実施。

2013年（平成25年）

9月6日（金）	柴川敏之に本展覧会への協力依頼
11月21日（木）	柴川と担当者との打合せ、下見

2014年（平成26年）

5月10日（土）	柴川と担当者との打合せ（於：就実大学・就実短期大学）
6月29日（日）	シンポジウム『筑後の大地と創造力』 基調講演「里山資本主義における芸術文化」パネルディスカッション「筑後の大地と創造力」
8月28日（木）–9月1日（月）	柴川と担当者との打合せ、関連施設への挨拶回り、リサーチ等（於：羽犬塚商店街協同組合、建設中の八女市岩戸山歴史文化交流館、筑後市役所、八女市役所 他）
8月30日（土）	連続クロストーク『ちくごアートひろば』：第1回「八女の古墳群と芸術文化」
10月4日（土）–10月6日（月）	柴川と担当者との打合せ。サテライト展示への挨拶回り、リサーチ、モノ選び等（於：福岡県立美術館、福岡県立筑後特別支援学校、八女伝統工芸館、近松岩吉商店、岩戸山歴史資料館 他）
10月18日（土）	連続クロストーク『ちくごアートひろば』：第2回「筑後の地域資源とアート」
11月26日（水）–12月1日（月）	柴川と担当者との打合せ。サテライト展示への挨拶回り、リサーチ、モノ選び等（於：福岡県立美術館、赤坂飴本舗、近松岩吉商店、CRAZY AUTO、福岡県立八女工業高等高校、八女伝統工芸館、うなぎの寝床 他）
11月28日（金）	関連企画1：プレ・ワークショップ1「2000年後の筑後を発掘しよう！」（於：福岡県立筑後特別支援学校）
11月30日（日）	関連企画2：プレ・ワークショップ2「2000年後の筑後を発掘しよう！」
12月20日（土）–12月22日（月）	搬入、展覧会準備、会場設営等
12月23日（火・祝）	展覧会初日
12月23日（火・祝）	関連企画3：アーティストトーク「2000年後のピラミッドへようこそ！」
12月23日（火・祝）	連続クロストーク『ちくごアートひろば』：第3回「地域の記憶を紡ぎだす」
12月24日（水）	サテライト展示の展示作業（於：近松岩吉商店、赤坂飴本舗、うなぎの寝床）
12月25日（木）	サテライト展示初日
12月27日（土）	関連企画4：学芸員による「2000年後のピラミッドトーク～未来の王様は誰だ!?」 （会期中の土曜日：1月17日、24日、31日、2月7日、14日）

2015年（平成27年）

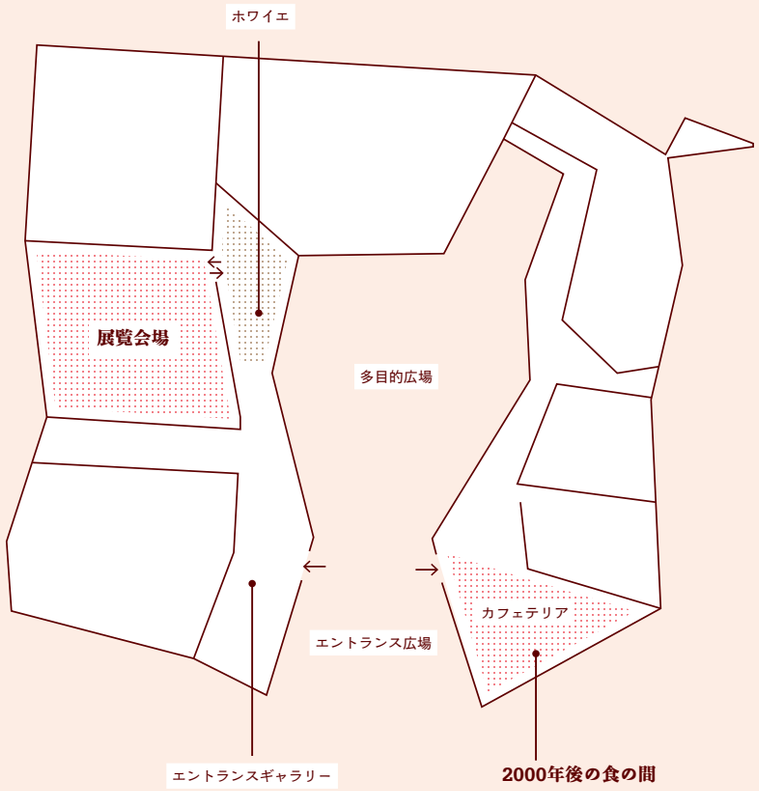
1月10日（土）	関連企画5：ワークショップ「2000年後の化石を作ろう！」
1月10日（土）	関連企画6：ギャラリートーク「41世紀と21世紀の考古学者によるトーク」
1月11日（日）	「2000年後の絵手紙☆プロジェクト～2000年後の人へ絵手紙を送ろう!」 （会期中の日曜日：1月18日、25日、2月1日、2月8日、15日）
2月8日（日）–2月10日（火）	会場撮影（末正真礼生氏）
2月15日（日）	展覧会最終日、サテライト展示最終日
2月15日（日）	関連企画8：ギャラリートーク「みんなのお宝トーク～2000年後のお宝」
2月16日（月）–2月18日（水）	撤去作業、搬出
3月31日（火）	『ちくごアートファーム計画』記録集発行

2017年（平成29年）

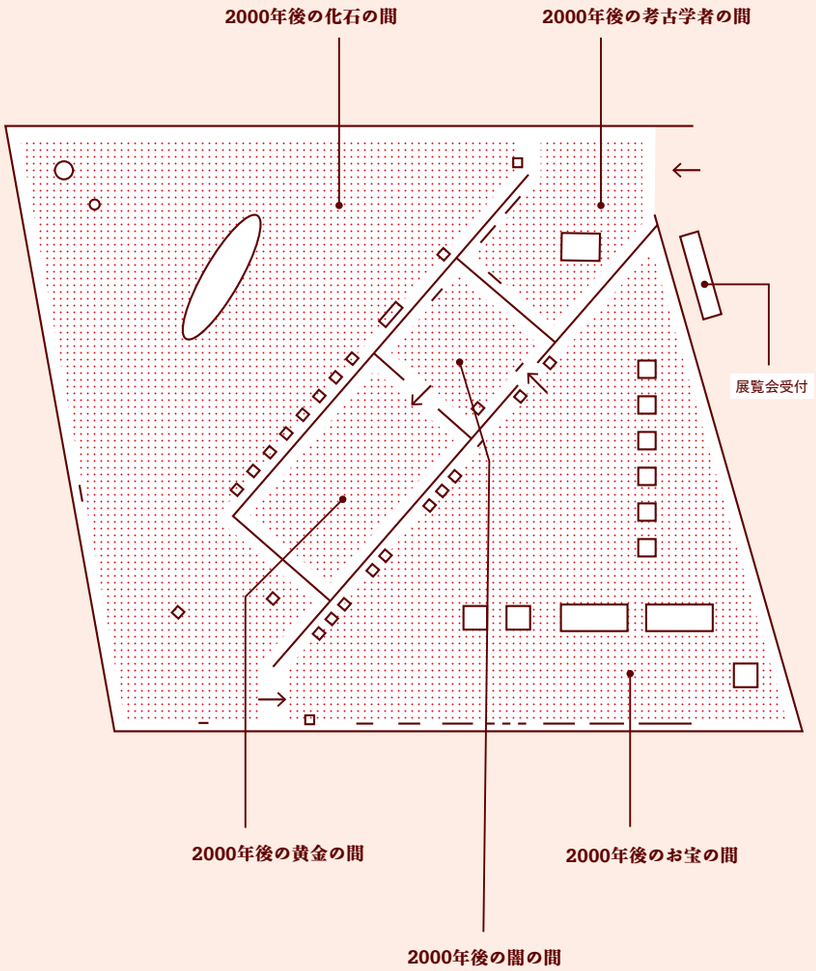
3月31日（金）	『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』記録集発行

展示配置図

九州芸文館｜全館



展覧会場



会場風景 | Installation View

2000年後の考古学者の間

会場入口には、スフィンクスに見立てた「2000年後に発掘された招き猫の化石」を展示。左手を動かして来館者を迎える。壁には「2000年後に発掘された世界地図の化石」を展示。日本や九州はどこへ。「2000年後の考古学者のミニ机」には、以下の３つのイメージが重ねられている。

1： 2000年後の考古学者が、出土品のトロフィーを修復したり、出土したものを分類整理している様子。

2： 柴川のアトリエのミニ机を再現。これらの化石作品は絵画的技法*で制作されている。

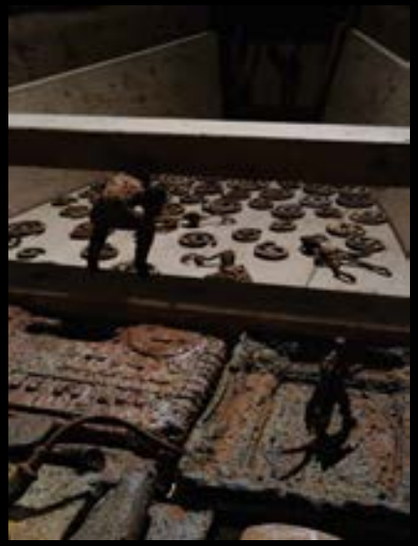
3： 机の上には、「2000年後のピラミッド」としての九州芸文館とJR筑後船小屋駅周辺の遺跡。

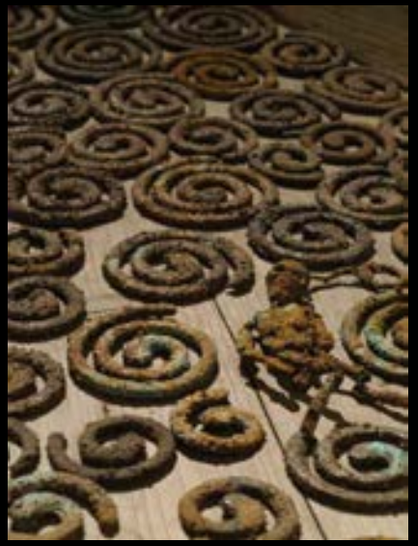
＊制作方法は、身近な素材（石や砂、ポンペイの溶岩、広島の被爆建物のレンガ、金属のさび、貝殻等）を粉状にして顔料を作り、絵画で使われるメディウム（にかわ、卵黄、油、ロウ、アクリル樹脂等）と混ぜ合わせて絵具を作っている。この絵具を、キャンバスに見立てた身近なモノ（ヤスリをかけたもの）を支持体として、そこに一層を100年と考え20層の絵具を塗り重ねて、2000年後の化石（出土品）のイメージを表現していく。

2000年後の化石の間

2000年後の世界をイメージし、柴川作品（2000年後に発掘された乗り物や日用品の化石等）と船を中心に構成。この船は、筑後地域の川船[*1]で、中には柴川作品が敷き詰められている。
2000年後に発掘されたこの船が、宇宙空間のような砂漠の大地または水面に出現。キュービー人形の化石が船頭として何かに向けて進んでいる。同時にこの空間は、船小屋でもある。[*2] この船の進む姿や方向は、筑後地域やこの国の行方を暗示しているかのようである。

＊1　九州芸文館の側を流れる矢部川でかつて実際に使用されていたもの（木造船、八女民俗資料館蔵）。
＊2　九州芸文館に隣接する「筑後船小屋」という駅名の由来は、近くの矢部川一帯に川船を格納する小屋がたくさんあったため。





筑後地域の川船（木造船、八女民俗資料館蔵）の中に、「2000年後に発掘された現代の品々」を並べたインスタレーション作品。
船内にはたくさんの柴川作品が敷き詰められている。それらは船頭の所持品でもあり、操縦席（前方2段目）でもある。船内を俯瞰すると筑後の町並みが現れ、津波（前方1段目の蚊取り線香等）で人々が巻き込まれ、筑後の町並み（前方2 ～4段目）を襲っている。
この船の進む方向は、これからの筑後の町やこの国の行方を暗示しているかのようである。

「2000年後のピラミッド」としての九州芸文館。4つの三角定規の化石で構成されている（p.16参照）。

壁面には、「2000年後に発掘されたJR九州の遺構」を設置した。その下には九州新幹線（左右）と在来線（中央）の化石を展示し、ボタンを押すと汽笛や社内のアナウンスの音声が流れる。
壁面に並ぶ展示台には、2000年後のピラミッド内の副葬品としての品々（人形や楽器の化石）を展示した。

前の部屋「2000年後の考古学者の間」に設置された世界地図の化石では消えていた日本列島は、九州のみここで発見された。左頁はゆっくりと回転する「2000年後に発掘された地球儀の化石」。よく見ると核兵器が使用された場所や、原発事故が起こった場所に穴が空いている。

2000年後のお宝の間

2000年後のピラミッド内の一室として、筑後地域のお宝を収蔵する「2000年後の博物館」をイメージして構成。福岡県立美術館所蔵の筑後ゆかりの画家や彫刻家の作品、岩戸山古墳から出土した考古資料、この地域の伝統工芸（箱雛・燈籠人形、石灯篭、赤坂人形、夫婦えびす等）を柴川作品と混在させてコラボレーション展示した。

この壁面には、柴川作品（2000年後の筑後で発掘された絵画の化石等）と筑後ゆかりの画家の作品が混在して並ぶ（以下右順）。

- 2000年後に発掘された青木繁の絵画の化石
- 2000年後に発掘された坂本繁二郎の絵画の化石
- 坂本繁二郎の絵画（福岡県立美術館蔵）
- 2000年後に発掘されたお面の化石
- 2000年後に発掘されたピカソの絵画の化石
- 髙島野十郎の絵画（福岡県立美術館蔵）
- 2000年後に発掘されたモネの絵画の化石

2000年後に発掘された玩具のお面の化石｜坂本繁二郎《能面》（福岡県立美術館蔵）

右の絵画作品は筑後地域の久留米市出身の画家、坂本繁二郎の《能面》。能面三面を寸分も動かし難い微妙な位置関係で画面上に配し、能における呼吸やはりつめた緊張感を象徴的に表現している。暖色を主体とする背景の色調は能面の優雅さを強調しつつ、観る者を奥深い幽玄の境地へと誘う。画面は能の舞台だ、能の深みと絵の深みはどこかでふれ合っている、と語る坂本の思想が本作において存分に作品化されているといえよう。

柴川は、この絵画のモチーフとなった３つの能面をヒントにしてお面の化石を制作し、坂本繁二郎の《能面》と並べて展示した。2000年後のピラミッドに眠る現代の人々の顔を、玩具のお面になぞらえ、１つ目のガラスケース内の人物埴輪（p.56）や、「2000年後の黄金の間」に眠る現代の人々（トロフィー等、p.70）への伏線としている。

坂本繁二郎（1882-1969）は筑後地域の久留米市出身の洋画家。森三美に洋画の基礎を学び、1902年上京。不同舎、続いて太平洋画会研究所で学ぶ。1910、11年と文展で連続受賞。1913年二科会の創立に参加し、同会には1944年まで所属する。1921年渡仏。1924年帰国後は久留米市に居住し、1931年八女郡に転居。能面や果物、茶碗や書物等、日常身近にある道具や題材を取り上げて、静謐で精神性の高い静物画を制作した。1954年に毎日美術賞、1956年に文化勲章を受章。戦後は無所属のまま終生この地で幽玄質実な絵画を追及。芸術院会員辞退が示すように超俗的な制作姿勢で一生を貫いた。

青木繁とは生年が同じであり久留米高等小学校でも同級であった。28歳で夭折した青木に対して、坂本は87歳と長命。また画風も浪漫主義的な青木に対して静謐な坂本というように両者は生涯・作風とも好対照をなす。

髙島野十郎《洋梨とブドウ》（福岡県立美術館蔵）

筑後地域の出身の洋画家、髙島野十郎による静物画《洋梨とブドウ》。中世ヨーロッパの静物画においては画家によってしばしばそこに「メメント・モリ」（ラテン語で「死を想え」の意）の寓意が込められている。果物は腐りゆく運命にある儚い美しさを示すもの、ひいては加齢や衰退を象徴するものであり、ブドウはとりわけキリスト教絵画においてはイエスが将来血を流すことを示すモチーフである。

白テーブル上の洋梨とブドウを精緻な筆致で写実的に描きだすこの静物画においても、隣り合わせた生と死のあわいに向けられる静かな眼差しをそこに読み取ることができよう。「メメント・モリ」なる寓意を想起させるこの静物画は、人類が滅びた後の2000年後の世界をモチーフとする柴川空間にあって欠かせない存在感を帯びながら、まるで祈りを捧げるかのように佇んでいた。

髙島野十郎（1890-1975）は坂本繁二郎と同じく久留米出身で、「孤高の画家」あるいは「蠟燭の画家」として知られる洋画家。久留米市の酒造家に生まれ、県立中学明善校、名古屋の旧制第八高等学校へと進学。東京帝国大学農学部水産学科に入学、1916年首席で卒業するも、周囲の期待に反し、念願であった画家への道を選ぶ。「世の画壇と全く無縁になることが小生の研究と精進です」とする野十郎は、独学で絵を学び、風景や静物を対象に徹底した細密描写による写実を追及した。1929年からアメリカ経由で渡欧。フランス、イタリアなどを写生旅行する。1933年帰国後は筑後地方、東京、晩年は千葉県柏市に幽居し、個展のみを発表の場とした。美術団体に所属せず、家庭を持つことさえ望まず、流行や時代の趨勢におもねることなく、自らの理想とする絵画をひたすら追求する超俗的な生活を送った。

2000年後に発掘されたキュービー人形の化石｜岩戸山古墳で出土した石人の頭部（岩戸山歴史資料館蔵）

6世紀頃に築かれた岩戸山古墳（p.17、99参照）では、たくさんの石人石馬が発掘されている。これらは石製の埴輪のようなもので、石人は人の形に、石馬は馬の形に。その他、鶏や猪等の動物の形に彫られている。素材は阿蘇山の凝灰岩が使われている。この展示台では、キュービー人形が石人にも見え、石人の頭部がキュービー人形の頭にも見えるように展示した。石人が岩戸山古墳の象徴的な出土品であるように、キュービー人形は「2000年後のピラミッド」の象徴的な出土品である。

これらの展示台には、柴川作品と筑後地域ゆかりのモノ（彫刻家の作品・石人の頭部・燈籠人形）を組み合わせてコラボレーション展示した。

1. 2000年後に発掘されたパソコンのキーボード・マウスの化石｜豊福知徳《構成》

2. 2000年後に発掘された武士をモチーフにした人形の化石｜舟越保武《原の城》

3. 2000年後に発掘された髪留め、ビューラー、くしの化石｜冨永朝堂《卑弥呼》

4. 2000年後に発掘されたピストルの玩具の化石｜豊福知徳《継続》

柴川作品と筑後ゆかりの彫刻家の作品（福岡県立美術館蔵）をそれぞれ関連づけて展示した。1:パソコンに見立てた展示。2:武士をモチーフにしたもの同士。3：道具で身だしなみを整えている様子。4：射撃の的に穴が空いた様子。

2000年後に発掘されたゲーム機のコントローラーの化石｜八女福島の燈籠人形（八女民俗資料館蔵）

この燈籠人形は、福岡県八女市で江戸時代から続く「からくり人形芝居」の中で登場する動く人形で、国の重要無形民俗文化財に指定された。2000年後には、ゲーム機のコントローラーで動く人形として解釈されているかもしれない。

2つのガラスケースには、6世紀頃に筑後地域に築かれた八女古墳群や立山山古墳群からの出土品56点と柴川作品46点とをコラボレーション展示した。

1つ目のガラスケースには、装身具や食器類を中心に八女古墳群や立山山古墳群から出土した鉄製品以外の考古資料26点（岩戸山歴史資料館蔵）と柴川作品26点とを混在させてコラボレーション展示した。
中心に置いた埴輪を「2000年後のピラミッド」で発掘された王（人々）と見立てて、その人物が使用していたモノを並べて展示した。例えば、出土品の矢じりを歯（あるいは義歯）に見立てて、2000年後に発掘された入れ歯や歯ブラシの化石と共に展示。その他、以下の出土品と柴川作品とを合わせて展示した。

縄文時代後期の石鏃、弥生時代後期のミニチュア土器・壺形土器、古墳時代前期の勾玉・ガラス玉、古墳時代後期の人物埴輪（入墨をした顔）・平緑四乳文鏡・碧玉製 棗玉・銅地銀張耳環・銅製鈴具

2つ目のガラスケースには、道具類を中心に八女古墳群や立山山古墳群から出土した鉄製品の考古資料30点（岩戸山歴史資料館蔵）と柴川作品20点とを混在させてコラボレーション展示した。
「2000年後のピラミッド」で発掘された王（人々）が使用した通信機器・文房具・武器等をイメージして展示した。
例えば、鎧の部品である挂甲小札をスマートフォンのスクロール機能のように並べ、選んだ部分が携帯電話の化石になっていたり、弓付属金具を携帯電話の電波のアンテナ表示の数に見立てて展示。
また、辻金具（帯が交差する部分に取り付ける馬具）を武器やUFOにに見立てて、2000年後に発掘された『太陽の塔』の化石と共に展示。その他、以下の出土品と柴川作品とを関連付けて展示した。

古墳時代後期の鉄鏃・刀子・鋏・鉄製鞍金具・挂甲小札・弓付属金具・鞍・留金具・辻金具

赤坂人形（赤坂飴本舗蔵）

2000年後に発掘された玩具の化石

上：この人形は、筑後市の郷土玩具として親しまれている素焼きの土人形。江戸中期から「赤坂焼」の陶工が、仕事の合間に製作していたものといわれ、今もその当時の貴重な型を用いて手作りされている。

下：上の赤坂人形と似た構成で展示した。このように並べてみると赤坂人形は、江戸時代には今のキャラクター玩具のように子どもたちに大人気だったのかもしれない。

2000年後に発掘された携帯電話の化石｜箱雛（八女民俗資料館蔵）

箱雛のように桐箱に入れた携帯電話の化石

上：箱雛は、八女市の伝統雛人形。江戸時代は贅沢を禁止されていたため、この雛人形は、隠したり運んだりしやすいように木箱に入れられた。このように引き離された男女の通信手段は、現代であれば携帯電話であろう。

下：2000年後の土の中からは、人骨1体につき携帯電話の化石が1個のようにペアで発掘されている。携帯電話も「箱雛」のように贅沢品として桐箱の中に入れて展示した。

奥にある2000年後の闇の間と黄金の間の周りを囲むように「2000年後に発掘された品々」を展示した。

埴輪のような玩具人形の化石の他、福岡ソフトバンクホークスの選手が使用したボールやグローブも化石となって出土した。

＊2016年、JR筑後船小屋駅の隣（線路を挟んで九州芸文館の反対側）に野球場「HAWKSベースボールパーク筑後」がオープン。

次の部屋「2000年後の闇の間」の入口には、「八女石灯籠」の狛犬二体（八女伝統工芸館蔵）を設置し、魔除けとして奥の部屋を見守っている。これらは、筑後地域の伝統工芸品で、阿蘇火山の凝灰岩で作られている。

2000年後の闇の間

筑後地方の古墳に見られる「前室」「玄室（後室）」の構成にならい、「前室」を「2000年後の闇の間」として、「玄室（後室）」を奥の「2000年後の黄金の間」として構成。鑑賞者は「2000年後に発掘されたメトロノームの化石」のネジを巻くことによって音が鳴り、2000年後への時を刻む。この音を背後に聞きながら、筑後地方ゆかりの画家、髙島野十郎の《蝋燭》（福岡県立美術館蔵）を前に精神を研ぎすます。

2000年後の黄金の間

エジプトのピラミッドは、王権社会のもと一人の権力者を祀っており、頂点が一つである。それに対し、九州芸文館の建築デザインでは複数の頂点を擁している（参照p.16）。「2000年後に発掘された現代のピラミッド（＝九州芸文館）」では、王（主権者）とは市民であり、民主主義社会のもと多くの市民を祀っているという設定で、多くのトロフィーを墓に見立てて展示した。これらの上部にあるフィギュアは、死者の生前の個性を象徴している。

これらの金色のトロフィーや金色のオブジェは会期前・会期中に市民から募集したもの。壁面の作品は筑後地域の赤い装飾古墳をイメージしながら、福岡県立筑後特別支援学校中学部1・2年生と市民それぞれがワークショップで制作したもの（pp.103～104）で、現代の身近なモノが写し取られ部分的に筑後ゆかりのモノ（筑後市ご当地ナンバープレート、ブリヂストン製タイヤ、大川組子等）の図像が含まれている。

ここは現代の民主主義社会の象徴を奉る場所なのである。

金色の郵便ポスト型の貯金箱と仏壇の飾り等

2000年後の墓に見立てた様々な分野の優勝盾

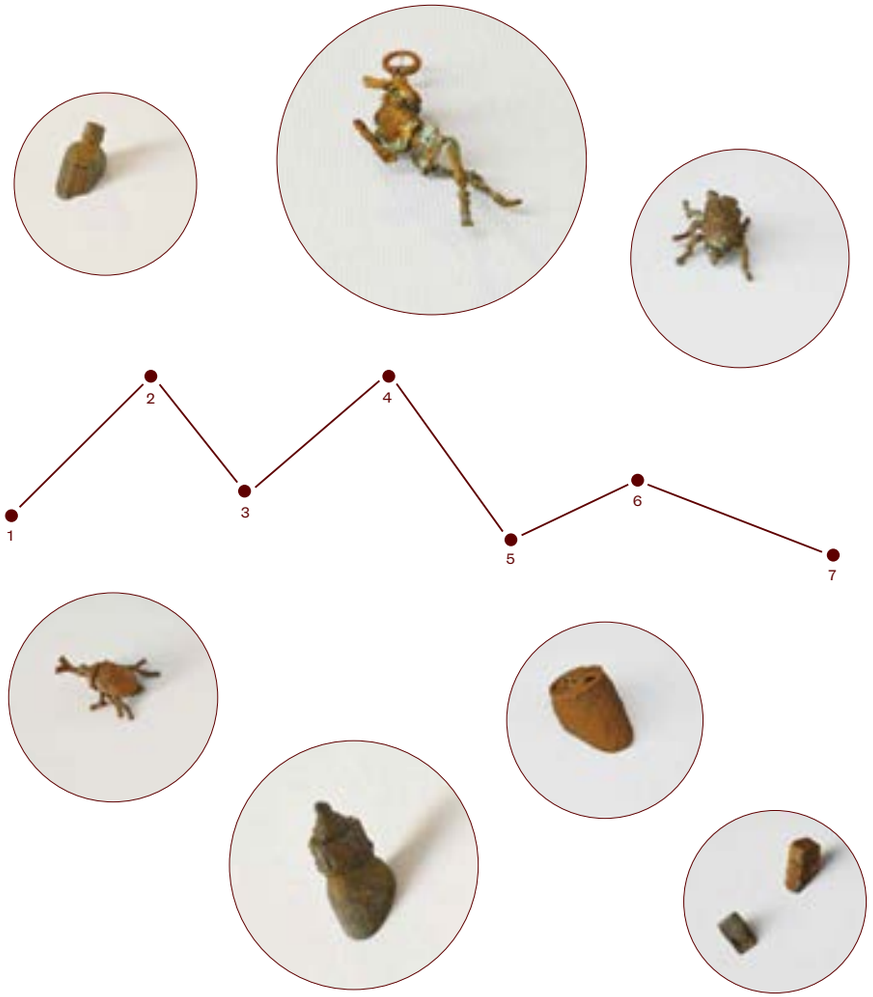
市民から募集した金色のオブジェの中には、様々なモノがある。家の中に眠っていた金色の置物、飾り、食器、玩具、仏具、クリスマスグッズ等を、このピラミッドの王である市民たちへのオマージュとして展示し、会期中も増殖させていった。

人型のレリーフのある各ジャンルの優勝メダル

仏壇の鈴（りん）の中やまわりには、金貨に見立てた2000枚の5円玉（1万円分）

未来の王様は誰だ!?

Who will rule the future?



壁面には「ななつ星」の店名にちなみ、7つの化石作品を星座のように配置した。星座の形は九州芸文館の複数の三角形で構成された建築デザインをイメージした。これらの作品は、双眼鏡（入口1カ所、店内3カ所）を使って鑑賞できる。また、ワークシートに7つの化石名を記入すると、展覧会入口で記念品がもらえる。

1.カブトムシ玩具の化石　2.ペットボトルの化石
3.哺乳瓶の化石　4.骸骨キーホルダーの化石
5.空き缶の化石　6.クワガタ玩具の化石　7.電車玩具の化石

入口のカウンターでは、2000年後に発掘された招き猫の化石が、左手を振って来店者を迎える。双眼鏡の設置場所付近に本展用の特別席を3席設けた。テーブルクロスには、ワークショップで制作した赤い拓本作品の一部を使用した。机の上は赤い発掘現場と化し、発掘するような気分で特別メニューを食すことができる。また、壁面の作品を鑑賞する上でも全体が見やすい席である。

2000年後の食の間——カフェレストランななつ星

特別メニュー

2000年後の発掘丼

カフェレストラン「ななつ星」の店長が、柴川や九州芸文館スタッフと議論しながら考案した会期特別メニュー「2000年後の発掘丼（1,200円）」「2000年後の地層パフェ（600円）」「2000年後の黄金のキンツバ（400円）」が提供された。「発掘丼」はスコップ型のスプーンで発掘しながら食べ進めるうちに丼の中から筑後地方や九州産の食材（ウナギかば焼き・国産鶏の塩唐揚げ・南蛮ダレ白身フライ・みやま名物高菜・博多名物明太子）が出土する。

2000年後の地層パフェ／2000年後の黄金のキンツバ

「地層パフェ」は焦がしたマシュマロと竹炭入りの黒いスポンジ生地が発掘現場を思わせる。中には石型チョコやマグマを思わせるイチゴソース等。「黄金のキンツバ」はピラミッドの石をイメージして作られた。地元の八女茶と一緒にいただく。

地域連携プログラム

『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』の会期中、筑後エリアの３店舗に協力いただき、各店で柴川作品のサテライト展示を行った。３店とも筑後の地域に根ざした商品を扱っており、柴川作品を通して来店者とお店の方とのコミュニケーションが広がった。本展の来館者は、これらの店に実際に足を運び、展示の主旨や筑後地域の文化や特性への理解を深める機会となった。

　また、本展と同時期に福岡県内で２つの展覧会が開催されており、そこで本展と関連付けた展示を行うことで相乗効果を期待し、連携を試みた。福岡県立美術館では、筑後地域ゆかりの画家と彫刻家の７つのコレクション作品が本展で展示され、それに合わせて、柴川作品３点を同館主催のコレクション展でコラボレーション展示した。北九州市立美術館では、本展と同時期に、柴川が出品する「記憶」をテーマとした企画展が開催されており、その展示の中でも一部本展と関連させた展示を行った。

サテライト展示

会期：2014年12月25日（木）－
2015年2月15日（日）

・サテライト展示1：近松岩吉商店 室岡店
・サテライト展示2：赤坂飴本舗
・サテライト展示3：うなぎの寝床

コラボレーション企画

『開館30周年記念｜コレクション展連続企画
2014-15 第1弾 特集「福岡の近代洋画」』
会期：2014年11月29日（土）－
2015年2月1日（日）
会場：福岡県立美術館

同時期開催展

**『開館40周年記念｜アート・オブ・メモリー
記憶をめぐる4つのレシピ』**
会期：2015年1月4日（日）－2月22日（日）
会場：北九州市立美術館

サテライト展示1

近松岩吉商店 室岡店｜〒834-0066 福岡県八女市室岡48-1

本店で一番大きな仏壇に《2000年後に発掘された招き猫の化石》をご本尊として展示。左手がゆっくりと動いている。

上の仏壇の右横手前に《2000年後に発掘されたメトロノームの化石》を展示。右下のネジをまわすと針が動き音が鳴る。

同店が所蔵する柴川の初期絵画作品《月のある地我像〜記憶のほとり》（F100号／ミクストメディア／1992年）を展示。

文化２年（1805年）創業の八女福島仏壇の老舗店。本展の「2000年後の黄金の間」に仏壇の展示等で全面協力いただいた。ここでは1階の店内に柴川作品２点と、同店が所蔵する柴川の初期絵画作品を展示。偶然にも同店はこの作品を1993年に広島市で展示された際に購入し、今も大事に店の２階に飾っている（※会期中は、1階のショーウィンドウに展示）。来店者からは「これ、何〜？ 面白い！ 動くの？」といった反応があったそうだ。近松信明氏（同店社長）は「なかなか思いつかない。発想に驚かされた」と話してくれた。

サテライト展示2

赤坂飴本舗 | 〒833-0054 福岡県筑後市大字蔵数312

店内正面のガラスケースでは、先代が制作した赤坂人形の中に《2000年後に発掘された招き猫の化石》を展示。

赤坂人形の商品と共に展示されていたキュービー人形と《2000年後に発掘されたキュービー人形の化石》を並列展示。

ご夫婦で営んでいる家庭的な雰囲気。現在、赤坂人形を作っているのは店主の野口紘一氏のみ。

明治15年から手作りの赤坂飴を販売する傍ら、郷土玩具や民芸品として親しまれてきた赤坂人形の製作・販売をしているお店。本展では「2000年後のお宝の間」にもご協力いただいた。ここでは店内の商品棚に柴川作品2点を展示。招き猫の化石は、先代が製作したという赤坂人形の数々と共に。キュービー人形の化石は、たまたまお店に飾ってあった2体のキュービー人形と並列展示した。来店者は「あら、動いてる〜！」「猫ちゃんがおいでおいでしよるね〜」と面白そうに、招き猫の化石を眺めていたそうだ。野口文江氏（店の女将）は「発想がとても面白い」と話してくれた。

サテライト展示3

うなぎの寝床 | 〒834-0031 福岡県八女市本町267

店内正面のレジの脇に《2000年後に発掘された招き猫の化石》を展示。来店者とのコミュニケーションを促した。

レジと反対側に《2000年後に発掘されたメトロノームの化石》を展示。「2000年後の音」が店内に響いていた。

店内の大きな台には、筑後地方・九州のものづくり（衣食住問わず）を中心とした商品がずらりと並んでいる。

本展の広報物デザインを担当した白水高広氏が経営するアンテナショップ。筑後地方を中心に近隣の場と人の魅力を発信し、食器、衣類、日用雑貨等を販売。ここでは店内に柴川作品2点を展示。来店者は、不思議そうに見たり、恐る恐る触ったり。簡単な説明をすると、感心する方、他の作品が気になる方、笑う方等。春口丞悟氏（店長）は「このような展示は初めてでしたが、本展示の会場外でも作品を目にする機会があるのは良い事だと思いました。触れる作品というのも魅力だったと思います。作品を買えないかという声も。僕も欲しいです（笑）」と話してくれた。

コラボレーション企画

福岡県立美術館 | 『開館30周年記念｜コレクション展連続企画 2014–15 第1弾 特集「福岡の近代洋画」』

福岡の近代洋画が並ぶ空間に《2000年後に発掘された絵画の化石》を展示。筑後ゆかりの青木繁や坂本繁二郎の作品も、額縁ごと化石化して出土した場合、2000年後の世界では祭具やお盆として展示されているかもしれない。（p.44 ～ 47参照）

絵画の中に《2000年後に発掘されたキュービー人形の化石》を展示。2000年後には彫刻や仏像として展示されているかもしれない。

展覧会入口では《2000年後に発掘された招き猫の化石》がお出迎え。来館者とのコミュニケーションツールとしても機能した。

本展は、福岡県立美術館のコレクションから「福岡の近代洋画」を紹介する展覧会。会場内に3点の柴川作品を特別出品することで、『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』とコラボレーションした。本展は、額縁に入った油彩画や水彩画等の平面作品のみで展示空間を構成され、その中に差し挟まれた「遺物（＝異物）」としての柴川作品は、多くの観衆の目を惹きつけていた。

会期：2014年11月29日（土）– 2015年2月1日（日）
出品作家：青木繁、梅原龍三郎、坂本繁二郎、高島野十郎ほか、柴川敏之（特別出品）

同時期開催展

北九州市立美術館 | 『開館40周年記念｜アート・オブ・メモリー 記憶をめぐる4つのレシピ』

《PLANET DESK（2000年後の考古学者の机～2000年後の北九州）》では、北九州市の町並みをリサーチし、机の上に2000年後の北九州市の町並み（小倉駅、リバーウォーク、若戸大橋、北九州市立美術館、スペースワールド、製鉄所等）を出現させた。（p.24 ～ 25参照）

入口では《2000年後に発掘された招き猫の化石》がお出迎え。

「2000年後の博物館」をイメージしたガラスケースの展示。

「2000年後の美術館」をイメージした展示。北九州市立美術館のコレクション（ドガ、マイヨール等）を想定した作品も展示。

本展は、「時代の記憶」「風景の記憶」「人の記憶」「自然の記憶」という4つのキーワードをもとに、4組の現代アーティストを紹介した展覧会。柴川は、「時代の記憶」を担当し、「2000年後の博物館と美術館」をテーマとした。ガラスケースの中には、2000年後の出土品を電化系・食品系・製品系・玩具系に分けて展示。会場には《2000年後に発掘されたメトロノームの化石》の音が時を刻んでいた。

会期：2015年1月4日（日）– 2月22日（日）
出品作家：柴川敏之、クワクボリョウタ、北上伸江、plaplax（プラプラックス）

関連イベント | Related Events

トークイベント・参加型イベント

『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』に関連して、下記のイベントを実施した。内容はトーク、ワークショップ、コスプレ等多岐にわたり、幅広い年齢層の方々が参加し、盛況であった。

トークイベントでは、まず本展開催前にクロストークを開催し、本展を企画する上でのキックオフとして柴川のこれまでの仕事を共有し、企画のアイデアを出し合う機会とした。本展の開催中は、柴川本人、考古学や美術の専門家、当館学芸員による様々なトークを行い、本展を様々な角度から語ってもらった。

参加型イベントでは、本展の開催前にプレ・ワークショップを開催し、子どもたちと共に本展の「2000年後の黄金の間」の赤い壁面で使用する帆布の赤い拓本を制作した。会期中は、2つのワークショップを開催し、平面と立体の2つのアプローチからの作品づくりを通して、「2000年後」の世界をイメージし、本展への理解が体験を通して深まる契機とした。また、来館者や展覧会の監視スタッフが、本展特製の衣装を身にまとい、自ら「2000年後の人々」に扮して展示空間に入り、鑑賞した。「2000年後」の世界のイメージが膨らみ、来館者同士や九州芸文館スタッフとのコミュニケーションが生まれた。

トークイベント

クロストーク「八女の古墳群と芸術文化」
アーティストトーク「2000年後のピラミッドへようこそ！」
学芸員による「2000年後のピラミッドトーク～未来の王様は誰だ!?」
ギャラリートーク1「41世紀と21世紀の考古学者によるトーク」
ギャラリートーク2「みんなのお宝トーク～2000年後のお宝」

参加型イベント

プレ・ワークショップ1「2000年後の筑後を発掘しよう！」
プレ・ワークショップ2「2000年後の筑後を発掘しよう！」
ワークショップ「2000年後の化石を作ろう！」
ミニ・ワークショップ「2000年後の絵手紙☆プロジェクト～2000年後の人へ絵手紙を送ろう！」
参加型イベント「2000年後の王様プロジェクト～王様気分で展覧会を見よう！」

クロストーク

「八女の古墳群と芸術文化」

2014年8月30日（土）14:00–16:00｜九州芸文館 アネックス1

講師：柴川敏之（美術家／就実短期大学教授）＋大塚恵治（八女市教育委員会文化課）

岩戸山古墳（福岡県八女市にある前方後円墳。写真提供：岩戸山歴史文化交流館）

筑後の“過去”がテーマ。前半、まず大塚恵治氏が八女の古墳群について紹介。八女古墳群とは、八女丘陵に広がる、前方後円墳・円墳合わせて300基以上が確認されている九州屈指の大古墳群である。その中には石室（石棺含む）の壁面全体が元々赤く塗られていた童男山古墳（古代の人々は悪霊が赤色を嫌うと信じていた）、6世紀にヤマト王権に対して乱を起こしたとされる筑紫君磐井の墓と考えられている北部九州最大の規模を持つ岩戸山古墳が含まれ、八女古墳群の出土品を特徴づける石人石馬等が出土している。古墳の紹介の後は、出土品が発掘されてから展示されるまでの洗浄や復元といった過程について、作業中の様子を写した写真を見ながら説明。出土品の紹介では、出土した場所等から地域間の交流がわかること、表現や加工の仕方から古代人の観察力や技術力の高さがうかがえること等を指摘された。

続いて柴川敏之が、自身のこれまでの活動について紹介。最初に携帯電話や玩具人形等、現代人にとって身近なものを化石化した作品を示しつつ、2000年後の未来に発掘されたとき、これらは一体何だと考えられるのだろうかと問いかけた。こうした制作の背景には、原発や戦争等人工的な災害の危険性をはらんだ現代への危機意識がある。展覧会の際には、会場に合わせて学校や博物館等コンセプトを変えながら、ユーモアある見立てのもとで出土品と作品を並べ、意図的な混同や新たなコンテクストを生み出していく展示を行っている。また帆布を使い拓本をとる作業を現代文明の発掘と見立てたワークショップも行っており、尾道市で行われたプロジェクトについてテレビ中継の映像を鑑賞。最後に九州芸文館で開催予定の展覧会（※『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』）の準備段階における構想を紹介し、市民参加型ということで、筑後に関わるお宝や金色の物品の提供を求めた。

後半は、休憩時間の間に参加者に書いていただいた展覧会に関わるアイデアにゲスト二人がコメントしつつフリートーク。展覧会開催に向けて有意義なアイデアが多数出された。筑後の過去について思いを馳せると同時に、未来に何が残るのか考える回となった。

参加費：500円（1ドリンク付・要申込）　参加者：一般38名

アーティストトーク

「2000年後のピラミッドへようこそ!」

2014年12月23日（火・祝）13:00–14:00｜九州芸文館 展覧会場

講師：柴川敏之

参加費：無料（予約不要）｜参加者：一般 35 名

柴川敏之本人が、来場者と共に会場を回りつつ、「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに現代の身近なものを化石化した作品を制作するに至ったきっかけやその手法、各部屋の展示の意図等について説明した。火山の噴火という自然災害により突如ポンペイが消滅した古代よりも、原発や戦争等人的災害の危険性をはらんだ現代の方が危険な時代なのではないかという柴川の問題意識、また現代の身近なものを化石化することにより現代文明を見直すという作品の制作意図を真摯に受け止める様子が見られた。柴川は音の鳴る作品（バイオリン、電車の玩具、メトロノーム等）を実際に鳴らしてみせたり、ユーモアのある見立てのもとでなされた展示の意図を解き明かしていく。こうした作家とのコミュニケーションを参加者は大いに楽しんでいた。

学芸員によるギャラリートーク

「2000年後のピラミッドトーク～未来の王様は誰だ!?」

毎週土曜日（1月10日を除く）14:00–14:30｜九州芸文館 展覧会場

講師：花田伸一・関岡絵梨花・矢追愛弓（九州芸文館学芸員）

参加費：無料（予約不要）｜参加者：一般のべ50名

本館学芸員が来場者と共に会場を回り、本展覧会の趣旨や展示の意図、個別の作品について説明した。特に柴川の作品と岩戸山歴史資料館の資料とを混在させた展示には、柴川作品の質の高さに驚いた様子をみせる参加者が多かった。参加者の問いや感想に学芸員が直接答えながら、展覧会をより楽しんでいただける機会となった。なお１月23 日（金）に臨時で開催した際は、学芸員のみならず来場者自身も用意された衣装を身につけて参加し、賑やかなものとなった。

ギャラリートーク1

「41世紀と21世紀の考古学者によるトーク」

2015年1月10日（土）15:00–16:00｜九州芸文館 展覧会場

講師：柴川敏之+大塚恵治

柴川敏之が未来（41世紀）の考古学者に扮し、現代（21世紀）の考古学の専門家である大塚恵治氏とやりとりをしながら展覧会場を案内する企画。柴川が、未来の考古学者として、化石化されたものの本来の用途を大塚氏や参加者に問いかけたり、制作者として、制作の意図や今回の展示の中に込められた様々な見立てを説明し、大塚氏がそれに専門家の立場からの感想や補足を行った。一貫して指摘されたのは柴川作品の“化石”あるいは“出土品”としての質の高さである。その中で、音の出るおもちゃを化石化した作品については、出土したものから音が出るということの不思議さと新鮮味を説かれた。また、発掘された考古資料について研究するとき、そこにはそのものが存在した時代における文脈からは切り離されているという“断絶”が存在する。現在考古資料に対して与えられている名称や、考えられている用途は、それを考古学者の想像力によって補ったものにすぎない。柴川の作品や展示の仕方がその“断絶”を上手く使っていることを説明されると、参加者は熱心に聞き入っていた。柴川の作品や今回の展示について、実際の考古学の現場で活躍されている専門家の観点から語られることで、作品の意義や展示の意図が観賞者により説得力をもって理解される機会となった。

参加費：無料（予約不要） 参加者：一般28名

ギャラリートーク2

「みんなのお宝トーク～2000年後のお宝」

2015年2月15日（日）15:00–16:00｜九州芸文館 展覧会場

講師：柴川敏之＋大塚恵治＋西本匡伸（福岡県立美術館副館長）＋花田伸一（九州芸文館学芸員）

展覧会最終日のイベントとして本展関係者4名によるリレートークが行われた。まず柴川から「2000年後の考古学者の間」「2000年後の化石の間」の展示について、九州芸文館に隣接する矢部川で実際に用いられていた船を活用した展示構成やJR筑後船小屋駅にちなんで列車や線路に関係する展示等に触れ、展覧会場の地理的・歴史的条件をふまえた上での展示である旨の説明がなされた。続く「2000年後のお宝の間」では、福岡県立美術館副館長の西本匡伸氏から坂本繁二郎、髙島野十郎、豊福知徳等本展に出品された筑後ゆかりの美術作品についての紹介と、これらの作品の価値を2000年後の将来にまで伝えていくことが美術館職員としての務めであり願いであるとの話がなされた。続けて八女市教育委員会の大塚恵治氏から本展に出品された八女市の八女古墳群の出土資料についての紹介がなされ、考古学者の想像力と美術家の想像力について、その共通点や違いが指摘された。最後に「2000年後の黄金の間」にて本展の企画担当キュレーターの花田伸一より、本展に込められたメッセージとして、九州芸文館の建築デザインを複数の頂点を擁する現代のピラミッドに見立てたことから、現代の民主社会における権力者は市民であり、市民一人ひとりが表現者になれる文化交流施設として九州芸文館を活用してもらいたいとのメッセージが語られた。

参加費：無料（予約不要）｜参加者：一般20名

プレ・ワークショップ1

「2000年後の筑後を発掘しよう！」

2014年11月28日（金）10:00–11:45

福岡県立筑後特別支援学校 体育館・プレイルーム

参加者：中学部1・2年生49名（※2グループに分かれて実施）｜講師：柴川敏之｜運営・制作補助：福岡県立筑後特別支援学校教職員20名、九州芸文館スタッフ6名

2000年後の筑後で発掘されるお宝とは!?　福岡県立筑後特別支援学校中学部1・2年生の皆さんと一緒に制作した。前日に柴川とスタッフが、日常生活の中で使っている身近なモノや筑後ゆかりのモノを床に敷き詰めて白の帆布で隠しておく。当日は子どもたちが、その上を未来のスコップに見立てたローラーを転がし、次々と2000年後のお宝を発掘！ 特製の柄の長いローラーも用意し、車イスからでも届くように配慮した。完成作品は、展覧会場の「2000年後の黄金の間」の壁面に展示した。なお、インクの色は、この地域の装飾古墳でよく使われている赤色（朱・弁柄）を使用した。

プレ・ワークショップ2

「2000年後の筑後を発掘しよう！」

2014年11月30日（日）13:00–16:00の随時（1回10分程度）

九州芸文館 エントランス広場・多目的広場

参加費：無料（予約不要）｜参加者：一般（幼児〜大人）30名｜講師：柴川敏之｜運営・制作補助：九州芸文館スタッフ4名

プレ・ワークショップ1とほぼ同じ流れで、幼児から大人まで参加した。来た人から順番に個別に実施し、参加者は受付でヘルメット・軍手・タオルを身につけて「2000年後の考古学者」に変身！　未来のスコップに見立てたローラーを転がし、柴川といっしょに「2000年後のお宝」を発掘した。身近なモノや筑後ゆかりのモノ（筑後のナンバープレート、大川の組子細工、久留米のブリヂストンタイヤ等）の形をローラーで写し取り、遺跡のような拓本を制作した。完成した作品は、展示会場の「2000年後の黄金の間」の壁面に展示した。また、「2000年後の食の間」のテーブルクロスとしても使用した。

ワークショップ

「2000年後の化石を作ろう！」

2015年1月10日（土）11:00–14:30

九州芸文館 エントランスギャラリー

参加費：500円（要予約）｜参加者：一般（幼児〜大人）10名｜講師：柴川敏之｜運営・制作補助：九州芸文館スタッフ3名

2000年後の未来を想像しながら、身近なモノ（携帯電話、玩具、文房具等）を化石にした。小学生を中心に親子も参加。軽量粘土に自分の好きなモノを押し付けて型を作り、そこへ砂と絵具を混ぜた特殊な石膏を流し込んだ。乾燥時間を利用して柴川と本展を鑑賞。その後、粘土をはずすと「白い化石」ができあがった。その表面を大きなネジ等で傷つけたり欠けさせたりした後に茶系の絵具を薄く塗り、乾燥後に布や紙ヤスリで削ると完成。最後に互いの作品を鑑賞しながら写真撮影。参加者は、自分の好きなモノが化石に近づいていく様子を楽しんでいた。

ミニ・ワークショップ

「2000年後の絵手紙☆プロジェクト
～2000年後の人へ絵手紙を送ろう！」

2015年1月11日以降の毎週日曜日 14:00–16:00の随時

（約10–30分）［※1月25日のみ 10:00–16:00］｜**九州芸文館 ホワイエ**

参加者：一般（幼児～大人）のべ64名｜参加費：100円（予約不要）｜講師：柴川敏之（※1月11日のみ）｜運営・制作補助：九州芸文館スタッフ3名

2000年後の未来を想像しながら、身近なモノ（蚊取り線香、車のエンブレム等）に和紙（筑後地方の八女和紙）をかぶせ、黒インクの付いたローラーを転がして絵柄を写し取った。この拓本にポスターカラーを使い、裏彩色（絵や版画の裏から色を塗る技法。棟方志功が版画の着色の際に用いた）で自由に着色した。乾燥後は半分に切り、2枚の和紙製ハガキに貼って2つの絵手紙を作った。1つは持って帰る家庭用、もう1つは「2000年後の人たちへのメッセージ」を書き、切手を貼って九州芸文館に送ってもらった。届いた絵手紙は、本展受付のあるホワイエに展示した。

参加型イベント

「2000年後の王様プロジェクト
～王様気分で展覧会を見よう！」

会期中随時 10:00–17:00｜館内各所（着替えコーナーは、展覧会入口の受付付近）

参加費：無料（予約不要）｜参加者：一般（幼児～大人）｜衣装デザイン・制作協力：香蘭女子短期大学ファッション総合学科の2年生24名

展覧会全体で未来のピラミッドや古墳の雰囲気を演出するために、身近なモノをローラー拓本で写し取った帆布を用いて製作した衣装（デザインは24種類）を準備した。来場者はホワイエにある本展受付でこれらの中から好きな衣装を選び、金色のアクセサリー等と共に身に付けて「2000年後の人々（王様、庶民、奴隷等）」に変身！ そのままの姿で記念撮影や展覧会鑑賞ができる。監視の皆さんもこの衣装で業務を行った。このコスプレを通して、作品と人が一体化し、2000年後という統一された空間となり、参加者同士や監視の皆さんとのコミュニケーションが生まれて会場は大いに賑わった。

2000年後から見る福岡県立美術館コレクション＆展覧会の総括

西本匡伸 | ちくごアートファーム計画実行委員会 委員長／福岡県立美術館 副館長

美術館の世界において未来について語られるのは、「この作品が将来にわたっても人々に鑑賞してもらえるように、しっかりと守っていかなければならない。」といった、作品保存に関わる責務のことが一般的だった。しかし今回、柴川さんのプロジェクトを通して、作品の未来のこと、そして時間の概念や感覚に大きな揺さぶりを受けた。

なにより時間の幅として、2000年というスパンは想定外に遠い時間である。作品を保存し守っていくという場合、よく口に上るのは「100年後、200年後」といった未来だ。2000年とは、天平時代の文物を伝える正倉院の御物が経てきた時をも超える時間である。そもそも2000年後の未来に、美術館や博物館という組織や仕組みが存在しているのかどうかも怪しい。2000年という未来を前にしては、人間の小賢しい英知など無意味なのかもしれない。そう考えると、九州芸文館において当館の坂本繁二郎や髙島野十郎の色彩豊かな作品と隣り合って展示されていた、褐色に「化石化」した額絵には、絵空事とは思えない、無力感を引き起こすほどのリアルさを覚えてしまう。

しかしながら、ギリシャ彫刻や中国秦の兵馬俑等はまさに2000年を超える過去の文化遺産である。それらは、戦乱や自然災害あるいは宗教的対立等、文化文明の衝突や地球環境の変動による幾多の破壊の危機を超えて現在に伝わったモノたちである。だが確率から考えれば、九州芸文館にずらりとならんだ、失われたモノの寓意物としての「化石」のごとき運命を辿った作品のほうが圧倒的に多いはずだ。

陳列された「未来の化石」たちは、失われた膨大な過去があることと同時に、壊滅的被害に遭うことなく幾千年を超えて今日に伝わった奇跡的な僥倖もあることも教えてくれている。柴川さんのプロジェクトによって私たちは、2000年という時間を前にした絶望的な気分と崇高的な気分をともに味わい、そして未来と過去が同居する奇妙な感覚を体験した。

今回のプロジェクトでは、九州芸文館は21世紀の筑後地域の文物が化石となって眠るピラミッドと化し、そして展示室の中心部はピラミッドの玄室として、21世紀の宝物を伝える黄金色のタイムカプセルと化した。化石となって実相がもはや判然としなくなってしまった過去、化石に変質することで新たな意味と価値を獲得した過去、化石に変質することを免れた過去、化石にすらなれなかった過去など、さまざまな過去の形がありうることを柴川ピラミッドは提示してくれた。

食や文化や自然など筑後の風土を多面的に捉えようとした「ちくごアートファーム計画」の最終ステージとして、柴川さんの展覧会は行われた。わたしたちは2000年先の筑後の未来に向けてどのような過去形を残そうとしているのか。この展覧会は、まさにそのことをこそ私たちに問うているのである。

現代美術の世界観と考古学の関係性

大塚恵治｜八女市教育委員会文化課

考古学は、現在までの間に奇跡的に残された僅かな痕跡を出土品から抽出し、過去に発生した事象を論理的に推定しながら、人がどのように生き、そして死んでいったのかを読み取っていく学問である。

数千年、時には数万年の月日が土中や水中で経過し、出土品である「モノ」は本来持っていたはずの「情報」の大半を失い、現代の我々が「モノ」を目の当たりにしたとき何も語りかけてくれない事は常である。

しかしながら、色や形、そして手触りなど、個人（調査担当者）が持てる五感や経験値を総動員しながら語りかけていくと、固く閉ざされた真実の歴史を少しずつ語り始めて来る事もあり、「モノ」が元来保持していたであろう「過去の本質」の核心に近づきつつある実感を抱くことができ、歓喜の感情が沸き上がると同時に、自身の思考の中で「過去」を操作してはいないだろうかという恐怖にも似た感情が芽生えることも常である。

このような過程を通じて、我々は「現代」という尺度で「過去」を垣間見ようと努力をしている訳であるが、柴川氏のアプローチは全く異なり、未来のある時点（柴川氏の語る41世紀の考古学者）に一旦軸足を置き、「過去」と仮定した現代を概観しながら当然のように生活を甘受している「今」を慈悲深い憂いを感じながら、更に先の未来に対する「危機感」を提唱している。

考古学は残念ながら、過去の「モノ」から汲み取った“推定された事象”も含めた先人達の足跡を検証し、近未来における「教訓」として提示する事は可能であるが、「現代」が基軸となるため「今」を資料批判する事は不得手な事の１つとなっている。

柴川氏の行う手法は「今」を化石化し、非現実的なビジュアルを提供する事で過去に対する「畏怖」、現代の「新鮮さ」、未来への「懸念」を感覚的に訴えかけているように私の脳裏には映っている。

今回、この『ちくごアートファーム計画』において柴川氏とコラボレーション事業を展開できた事は、自身にとって衝撃的な出来事であった。「モノ」が持つ本来的な姿はその時代の「今」であり、未来においては現代たる「今」が埋蔵文化財になる事への確信、そしてどんなに注力しても失われていく「今」の情報、それが故に、の未来への危機感。この感覚は考古学に携わる者として、今後注視すべき視点かもしれない。

「今」を時間軸の起点とする考古学。未来の「ある時点」を時間軸の仮起点として「今」を化石化し見つめる事で、現在を生きる我々に「あるべき未来」と「あるべき今」を提唱する柴川氏の現代美術。

改めて「今」想う。これは歴史の必然であった、と。

ちくごのピラミッドに迷い込んで

臼井敬太郎｜西日本工業大学 デザイン学部 建築学科 講師

近代建築史を専攻する私にとって、美術家・柴川敏之は気になる作家であった。歴史家のように過去と未来を自在に往復するものさしを備え、展示会場となる建築を入念に読み解き、その特徴を織り込んだインスタレーションを発表し続けてきたからだ。「2000年後のピラミッド」とほぼ同時期に開催された北九州市立美術館での「アート・オブ・メモリー」の展示においても同館設計者の建築家・磯崎新による建築的実験と北九州の地勢的特質が見事に翻案されていた。

柴川は「2000年後のピラミッド」の構想段階で九州芸文館の屋根型に複数の頂点を発見した。そこに古代ピラミッドのような権力者のモニュメントでなく、現代民主主義社会を語る姿を見出したという。鋭い視点である。なぜなら芸文館を設計した建築家・隈研吾は、これまでの普遍解であった箱物公共建築、時の首長の力を誇示する姿を絶えず否定してきたからである。芸文館においては、小さな斜面の集合体、集落のような優しい輪郭を与えることで、地域の人々から愛され、豊かな筑後の風景を引き立てる建築のあり方が目指されている。竣工直後に見学した際、これまでの格式張った文化施設に代わる清々しい外観に大きな魅力を感じた。他方で象徴性を回避するため多角形に分節された内部空間には建築的ハイライトを見つけられず一抹の空虚さを感じた。

今回、「2000年後のピラミッド」にて、未来を発見するべく九州芸文館を再訪した。照度の落とされた展示室に探検家気取りで足を踏み入れた。早々、自身の方向感覚と時間感覚が麻痺してきたことに少々たじろいだ。もともと多角形の部屋、その上下左右に配置された作品を辿るうちに、どこから歩いて来たのか心許なくなったのだ。坂本繁二郎の「能面」と「2000年後に発掘されたヒーローのお面」が並ぶ。はて、自分はどの時代に属していたか、そもそも時代と作品を照合することに意味があるかと自問自答する。ウィットに富んだ作品と展示方法で時間の輪郭を攪乱する柴川。それはルーバーやスリットという繊細な建築ディテールを多用して空間の輪郭を曖昧にする隈の設計手法にどこか通じている。両人は私たちの固定観念を揺さぶる最強の組合わせではないか。

それが確信に変わったのは、最奥部のインスタレーションである。ピラミッドにおける「王の間」に相当する「2000年後の黄金の間」である。筑後地方由来の文様に綾取られた真っ赤な部屋を、黄金のトロフィー群が埋め尽くしていたのだ。摩天楼の大都市を思わせる尖頭群は地域の人々の宝もの、各々の人生における晴れ舞台を象徴するものだ。耳を傾ければ、運動会での大歓声、音楽会における拍手喝采が聞こえてくるようだった。芸文館内部について欠けていると思われた建築的ハイライトが「黄金の間」に溢れる色と形、素材、そして賑わいによって見事に完成されていた。隈によって用意された芸文館パズルの最後のワンピースが柴川と筑後の人々によって嵌め込まれたのだ。心を奪われ、「黄金の間」にしばし立ち尽くした私。ミイラ取りがミイラになったとはこういうことか。

古墳で現代アート

宮本初音｜アートコーディネーター／ART BASE 88代表／WATAGATA福岡釜山アートネットワーク福岡事務局

このところ古墳が非常に気になっている。ふるい時代が気になるのは晩年に入ったということだろうか。もともと子どものころ、シュリーマンに憧れ、「未来への遺産」（NHK）が大好きだった。記憶にある最初の展覧会は福岡県文化会館（現 福岡県立美術館）の「弥生人展」である。そして、昨年（2014年）ついにハニワをテーマにしたアートプロジェクトを企画してしまった。

現代のハニワを描くワークショップを地元の子どもさんとおこない、そのイラストを元に、アーティスト オーギカナエさんがオブジェを制作し、駅前通りにパブリックアートとして期間限定で設置するという「景観社会実験」だった。（主催 博多まちづくり協議会、企画 ART BASE 88）

企画段階で、会場周辺にたくさんの前方後円墳やハニワ等が発見されていることを知った。いわゆる「博多遺跡群」である。中世の博多は日宋貿易が盛んで、当時は中国語が飛び交っていたらしい。いま歩いている通りの下にさまざまな時代のものが埋まっていて、時代をさかのぼってもやっぱり大陸と商売をしていて、いろんな夢を見て生きていた人たちの子孫として、私たちはここにいる。私たち世代は未来に何を伝えることができるのか。ハニワのプロジェクトはそういうことを思いながらつくった。

このハニワの企画を考えているころ、花田さんが古墳に関係する展覧会（本展）を計画していると聞いた。偶然ではないと思う。東北の大きな震災を経た私たちは、過去や未来のあいだに現在があること、未来へ伝えるメッセージについて、以前より強く感じるようになっている。そしてなによりここには大きな前方後円墳、岩戸山古墳がある。歴史で習った「磐井の乱」とは私たちの住む福岡県の歴史だった。この古墳には韓国との関係も深く関わっている。

習ったはず、知っていたはずだが記憶の底に眠っていたエピソードが、柴川展を通じて現代によみがえってきた。九州芸文館の館内だけでなく筑後や八女のまちなかに出ていった柴川さんの作品は、地域の風物、工芸や絵画、市民参加要素も絡めて、時空間を移動するような楽しいものとなった。未来の設定を思うとき、楽しいだけではない、ちょっとした怖さも感じた。現代美術という手法の柔軟性、特性がいかされ、多様な視点をさまざまな世代に示す実り多い展覧会だった。

さてそして、古代の造形物もまた、何らかの思いを乗せてつくられたものに違いない。私たちはそれらの多くを「祭事」と推測するしかない。柴川展と合わせて巡った岩戸山歴史資料館で出会った堂々たる石人の姿に改めて考える。これをつくろうと考えた人、実際に作った人、壊さずに残そうと思った人。その引き継ぎがあって、いま私たちと対している。現代美術（contemporary art）は、同時代（contemporary）の表現として制作されているけれども、もっとずっと未来のことを考えて作ってもいいのじゃないかなと思ったりしている。

参考文献
「中世都市・博多を掘る」編 大庭廣時 佐伯弘次 菅波正人 田上勇一郎（海鳴社／2008年）「岩戸山歴史資料館 展示図録」（編集発行 八女市教育委員会／2009年）「マンガ版 筑紫の磐井」原作 太郎良盛幸、作画 鹿野真衣（新泉社／2014年）

美味しいストーリーにはご用心

鬼本佳代子｜福岡市美術館 教育普及専門学芸員

柴川の展覧会には常にストーリーがある。そもそも展覧会にストーリーがあるのは当然のことだろうし、2000年後の未来から今を振り返るという彼の作品コンセプト自体が壮大な物語をはらんでいるわけだが、しかし彼の場合興味深いのは、展示室の各所で、さらに小さなストーリーがまるで連想ゲームにように紡ぎだされる点だろう。つまり、「2000年後」というコンセプトと、その場所が持つ歴史、そこに住む人々の経験、柴川の体験、作品化されたものが持っていたオリジナルの属性、作品の形が連想させるものなどなど…が織混ざり、さまざまな方向に広がっていく。そして展示だけでなく、ワークショップやレストランの展覧会特別メニューにまで展開していくのだ。

さて、柴川がこれまで作品制作とともに一貫して取り組んできたのが、ワークショップである。今回芸文館で行われたのは、ローラー拓本と裏彩色を使った絵手紙作りであった。しかし、単なる絵手紙作りで終わるはずはなく、参加者は加えて、2000年後の芸文館の人たちにメッセージを添えてこの絵手紙を出すというストーリー作りをせねばならなかった。制作の様子を見ていると参加者は難しい顔をして何度も首をひねっており、自分の想像力の限界に挑みながら言葉をしぼり出していた。柴川の絵手紙のワークショップは、参加者に、優しく、しかし、少し強引とも言えるほど強く、未来と過去を想像し、真剣にストーリーを創り出すことを促すのである。それは、柴川自身が、その物腰の柔らかさから想像もつかないほど、常に妥協なく、強い意志で創造というものに向き合っていることの表れでもあろう。

その真剣ぶりは、芸文館のレストラン「ななつ星」でも発揮されていた。展覧会のために作られた特別メニュー「2000年後の発掘丼」と「2000年後の地層パフェ」。2000年後の考古学者が現在を発掘するというコンセプトから作られたメニューであろうが、なかなかの絶品であった。柴川曰く「そうとうレストランとやりとりして、だいぶ思った味になった」とのこと。展覧会のサイドストーリーだからといって手を抜いていない。

ところで、今回は、展示に関しても参加型鑑賞が試みられていた。それは、芸文館がピラミッド型をしているということから連想され、展示ともリンクしていたのだが、エジプトのファラオの格好をして作品鑑賞をする、というものであった。筆者も恥ずかしながらファラオの格好をして展示を鑑賞した。そして、ピラミッドの玄室よろしく展覧会場の中心に設けられた仏壇やトロフィーで黄金に彩られた展示室に入り、骸骨のオブジェが上からギロリと見下ろすのを見ながら、ふと、こちらに熱い視線を投げる他の鑑賞者が目に留まった。そのとき、否応なく自分自身も「柴川敏之の展覧会」というストーリーの一部になっていることに気づかされたのである。

ここまで筆者は柴川のストーリー作りの徹底ぶりを書いたが、しかし、忘れてはならないのは、そこには同時に必ずユーモアがある、ということである。そしてこのユーモアこそが柴川の想像と創造の源であり、そして、彼の真剣な、ときに無茶ぶりともいえる要求にも関わらず、我々がそのストーリーに魅了される最大の要因ではないかと思うのだ。

時を渡る舟——「PLANET PYRAMID」の時空間

中村共子｜フリーランサー（美学）

石灯籠の狛犬が見守る「2000年後の闇の間」に入ると、洞窟のような暗闇に、髙島野十郎が描いた「蝋燭」の絵が浮かび上がる。錆付いたメトロノームが刻む単調な響きがかえって静寂をもたらし、私たちを時間旅行へ連れていく。入口を振り返って見上げると、髑髏と目が合う。ここはメメント・モリの空間だ。

柴川敏之の作品は一貫して「41世紀から見た現代社会」をテーマにしている。これまでも、柴川が独自に作った絵具を何度も塗り重ねる絵画的技法により生まれた現代の「出土品」と、全国各地、その土地の実際の発掘物を混在させて展示し、面白いまでの類似を見せてきた。過去の遺物がどう使われていたか私たちが想像しつつ見るように、未来の人々も誤解を含みながら現代を想像するだろう。誤解されるかもしれないことがこんなに楽しいとは。

だが遺跡になるということは、どんな文明でも「一夜にして」滅ぶ可能性を示唆している。宇宙から見れば地球は砂漠の砂粒だろうが、地球に刻まれた文明の記憶が、約100年で人生を閉じる人間の小さな営みや思い出を映していることは、小さなこと、ではない。私的な死を想うこと、長大な時間の中でそれを俯瞰してみること、多様に視点を変え、どう生きるか自分の答えを出すためのヒントが作品に散りばめられている。

実際、ニュースで古代アッシリアの遺跡が暴徒により破壊されるのを見、火山噴火や地震、津波等の自然災害で失われるものを見て、なすすべなく、形あるものはこわれる、本来無一物という諦観にも似た気持ちになる。だがどこかで、例えば海の底や地層の何処か、森林奥地や砂漠に埋もれた場所で、人々の想いが入った何かが静かに化石化し、時を経て発掘されるかもしれないと思うと、切ないがどこか光差すような気持ちにもなるのだ。破壊と構築は普遍的に起きてきたことだが、今生きて切実に感じる私たちにとって、彼の作品が持つ意味は深くなっている。

会場の深部に作られた、装飾古墳を思わせる赤と金色の祭壇では、光り輝く遺産が少しユーモラスに観客を待つ仕掛けだが、ここの王は市民で、ここは民主主義の墓だと聞く。柴川は学生時代に「地我像」シリーズで、建物を自画像として描いてきた経緯があるが、今展では隈研吾設計の九州芸文館をピラミッドに見立て、会場空間を現代社会の「地我像」として呈示した。

ピラミッド深部から闇の間の髑髏を通り、会場入口まで何度も往復すると、時空間や文化、縮尺の違う時の渦の中にいるようだ。象徴的なのは、実際この地で使用された木造の川舟に、様々な「出土品」を乗せた作品だ。エジプトの太陽神ラーの化身である王が、昼の世界から夜の死国へ永遠に巡る舟に乗る如く、現代のお茶の間を飛び回るキューピーが錆付いた羽のまま時空を進む舟の船頭となり、2000年後の世界へ向かっている。私たちの舟は進む。光の舟となるか、闇に満ちた舟となるか、危険をはらみながら揺れながら…。

風景をつくる画家

山下里加｜アートジャーナリスト／京都造形芸術大学 准教授

柴川敏之は、何者なのだろう？　彼の作品を見るたび、なぜか、いつもとまどってしまう。

たとえば、『2000年後のピラミッド』展に出展された“柴川作品”を見てみよう。招き猫やキャラクター人形、九州新幹線のおもちゃ、プッシュボタンのある携帯電話、歯ブラシ、CD等を加工した立体物が台座の上やガラスケース内に展示されている。では、柴川は立体造形作家なのだろうか…。

通常の立体造形作品であれば、素材の選択や造形の巧みさ、奇妙さに作家の固有性・執着が染み込んでいる。見る者はそうした情報を目で読み取りながら、自身の経験や知識、感情との距離をはかりながら作品をみていく。近しく共感する場合もあれば、遠く無関係に思う場合もある。

ところが、柴川作品の素材は一般的に流通している商品であり、一部を欠けさせたりしているものの誰でも素性のわかる造形である。つまり、柴川作品の立体造形の部分は、「現代」を指し示す記号として扱われているのだ。記号としての造形と自身との距離は、はかりようがなく、なかなか焦点があわない。

柴川の執着はどこにあるのだろう？　九州芸文館でその疑問はあっさりと解けた。展覧会場に入って最初に展示されていた『2000年後の考古学者のミニ机』。そこには3つのイメージが重ねられていると紹介されていた。1つが2000年後の考古学者の作業場。2つめが会場となった九州芸文館と筑後船小屋駅のミニチュア遺跡。そして、3つめが柴川のアトリエである。前者2つは、いわゆる架空のイメージ設定なのに対し、アトリエは生々しい現実である。実際、会期中のトークで、柴川は特製の絵具をつくるための素材、絵筆の種類、重ね塗りの技法を詳しく、熱を込めて語った。

そうか！ 柴川敏之は画家なんだ。そして、柴川作品の立体造形の部分は支持体（キャンバス）なのだ。彼の作家としての固有性・執着は、立体物の表面に現れる。そう思って会場を見渡すと、焦点がピシパシとあってくる。

招き猫も地球儀も姿かたちでなく、ぐっと近づいて表面のディテールを愛でる。そして1～2歩下がり、風景として眺める。船に満載された化石風の柴川作品も広角で眺めてみる。すると、鉄やプラスチックといった素材感も、携帯電話や蚊取り線香といった用途も失われた漠々とした風景が広がる。興味深いのは、本物の古墳群からの出土品と現代の柴川作品が並んだガラスケースの中の風景だ。標本として整然と並べられた品々は、豊かな日々の暮しを物語ると同時に、それが“すでに失われている／これから失われる”ことを能弁にしゃべっている。

画家・柴川が描きたいのは、“何かが失われた”風景ではないだろうか。おそらく2000年前でも2000年後でもなく、地球でもない、生命の喧噪が過ぎ去った静寂なる風景を、この画家は丹念にスケッチし続けている。私たちは柴川の描く風景のなかに紛れ込んでしまった、迷子の宇宙人なのかもしれない。

2000年後の権力と芸術の狂宴

花田伸一｜キュレーター

美術展『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』は福岡県筑後市の芸術文化交流施設、九州芸文館を拠点として2014年に取り組まれたアート・プロジェクト『ちくごアートファーム計画―筑後の風土と芸術文化』の一環として開催された。同プロジェクト全体の流れについては本書とは別に編集・発行された記録集があるので、詳細はそちらを参照いただきたい[1]。

本稿では本展のことにしぼり、展示構成の意図、構想時の問題意識等を同プロジェクト企画者の視点から記しておく。

＊　＊　＊

本展はメインの展示会場として九州芸文館の教室工房1・2と呼ばれる空間を使用した。同館の建築デザインは隈研吾建築都市設計事務所が手掛けており、その大きな特徴としては外観も各部屋の形状も概ね三角形の組合せで構成されている点が挙げられる。施設利用者の一人として正直に白状すると、このユニークな建築空間からは企画意欲を大いに掻き立てられる一方で、現実的にはこれらの三角空間を無駄なく使いこなすのは実に難しい。

本展では同館のロケーションやフォルムが砂漠のピラミッドを想起させるとの柴川の見立てにより「2000年後のピラミッド」を全体のテーマとして展示構成することとなった。使いこなすのが難しい三角空間といういつもは不利な条件がピラミッドに見立てられた瞬間に有利な条件へと様変わりする。ネガティヴとポジティヴを軽やかに翻していく、これぞアートの効能だ。これが2014年5月、展示の7ヵ月前のこと。

その後、柴川によるいくつかの構成案を基に検討を重ね、建築空間と展示の結びつきの必然性がより高くなるよう細部を詰め、筑後地域ゆかりの事物も加えながら展示を構成していった。その詳細は本書の図版ページを参照されたい。

展示では「2000年後の考古学者の間」「2000年後の化石の間」「2000年後のお宝の間」の部屋を経て、最終的にピラミッドの核心部分「2000年後の闇の間」「2000年後の黄金の間」へと至る。古墳やピラミッドでいえば華々しく装飾が施され権力者の棺が納められる石室にあたる場所である。

(1) 記録集『ちくごアートファーム計画―筑後の風土と芸術文化』ちくごアートファーム計画実行委員会、2015年

本展の「2000年後の黄金の間」では煌びやかな仏壇や仏具等の他、黄金のトロフィーおよびオブジェがびっしりと並び、周囲の壁には古墳の装飾壁画よろしく拓本壁画が張り巡らされ、全体として荘厳な空間が現出した。

華々しい空間でありながら、ここでは照明をかなり暗く控えめにした。石室は本質的には死に関わる場所なので、企画者としては、そこが軽々しく入れるような空間、ぱっと明るく白けた空間となるのは避けたかった。むしろ人によっては中に入るのを躊躇する、恐怖感をもたらすような部屋としたかった。ピラミッドの核心部分で黄金に輝くモノたちの美しさだけでなく、その背後にある狂おしさや禍々しさに無意識にでも触れてもらいたかったのである。

この美しさと悍ましさの狂宴こそが本展の核心なのだが、この点は改めて後述しよう。

＊　＊　＊

さて、柴川の作品はおそらく現代美術の中でも分かりやすい部類に入るだろう。私たちが普段よく目にする身近なモノが化石となって目の前に展示されている。あらゆるモノが濃茶色や錆色となり大小の砕石に混じって化石化している。実にシンプルである。いつも見慣れたモノが全て化石となって並んでいる様子は新鮮で痛快だ。

その分かりやすさゆえか柴川は現代美術の親しみやすさを伝える事業によく呼ばれ、主催者の期待通りに、いや期待通りではない、期待をはるかに超えるボリュームでもって応えてみせる。そして観客やワークショップ参加者に高打率で満足感をもたらしている[2]。

しかし、よくよく考えてみると柴川の2000年後の化石ワールドは決して親しみやすいだけでは終わらない要素を本質的に孕んでいる。そもそも作品の世界観の前提となっているのは我々がとうに死に絶えてしまった未来の世界だ。そこでは我々の現代文明は全て廃墟となっている。結論を急ぐが柴川作品の世界観には死の気配が色濃く立ち込めている。

柴川が現代文明を化石化する際に、例えば携帯電話やアニメのキャラクター等、いかにも現代的なモノや流行りモノを選ぶのは、観客へのサービス精神もあろうが、見方を変えれば、旬なモノであ

2013｜京都芸術センターでのインスタレーション（撮影：大島拓也）

(2) 展覧会『柴川敏之｜2000年後の未来遺跡｜三内まるごとミュージアム PLANET SANNAI』（青森県立美術館・三内丸山遺跡他、2008年）、『大原美術館の80歳をお祝いしよう！プロジェクト』（大原美術館、2010年）、『柴川敏之×てんとうむしプロジェクト｜2000年後の小学校｜PLANET SCHOOL』（京都芸術センター、2013年）、『柴川敏之｜2000年後の今に触れる☆プロジェクト｜PLANET TACTILE』（川崎市市民ミュージアム、2013年）等。

るほどそれを化石化したときのインパクトが大きくなるからだ。モノの死相をより際立たせるためには、そのモノが今現在フレッシュであればあるほど良い。

つまるところ柴川の制作活動は私たちの生の世界をリアルタイムに逐一、死の世界に翻訳する活動である。ここでもポジティヴとネガティヴが軽やかに翻される、これぞアートの効能。そこに通底するのは、奢れる人類への警鐘、死への畏怖の念等である。

とはいえ柴川の場合、色々な演出のおかげで死の気配は随分と和らいでいる。例えば舞台美術的な見せ方をとることで映画や演劇のような虚構感が増し、死のリアリティは薄まる。また観客に探検家、研究者等の設定をもたらすことで死に直面するシリアスさよりもワクワク感が演出される等々。このように「ごっこ」感覚、見立て感覚、交流の楽しさ等、死の重みを和らげるクッションがふんだんに施されている。

この遊び要素が柴川作品の大きな魅力でもある一方、それは同時に大いなる迂回でもある。先ほど挙げた、奢れる人類への警鐘、死への畏怖の念等といった柴川の核心に横たわる本質的な要素は、表向きには娯楽的な雰囲気のなかに漂白されがちである。したがって柴川の作品は正しくは、現代美術の中でも分かりやすいように見えつつ、その核心部分はオブラートに包まれているため実は分かりにくい、というトリッキーな部類に入るだろう。

現在、柴川は化石化したモノを単体で作品としているが、かつては展示室全体に発掘現場を丸ごと再現するようなインスタレーションを展開していた[3]。私はその展示空間を実際には体験していないが、その場は新鮮な驚きに満ちた楽しげな発見空間というよりも、どちらかといえば重々しくものものしい気配が漂っていたのではないかと想像される。少なくとも記録写真ではそのような雰囲気が強調されているように思える。

さらに遡って柴川の大学時代やその直後の絵画作品を見てみると[4]、その関心の核にあるのは廃墟の美学とでもいうべきもので、画面に漂っているのは、朽ち果ていく物への共感、非情に流れる時間への畏敬、不在なる者への惜情といったものである。

本展では古墳やピラミッド等、元来が死者のための建造物をテーマとして掲げることもあり、企画者としては柴川の発掘現場作品や

1999｜デビットホールでのインスタレーション（撮影：末正真礼生）

（3）展覧会『美術の時間vol.6 柴川敏之展　41世紀からのメッセージ』（デビットホール、1999年）、『ふれる・感じる・かたち展〜アートとおはなし』（海田町ふるさと館、2000年）、『今日の作家シリーズ｜柴川敏之展：PLANET CIRCLE』大阪府立現代美術センター、2001年）等。

（4）《月のある地我像》、油彩、キャンバス、116.7×116.7cm、1989年

絵画作品に色濃く見られる死の気配にこそしっかりと向き合いたかった。ミュージアムとは基本的には歴史を保存し後世に残し伝える場所である（九州芸文館はミュージアムではないが）。であるならばミュージアムとは元来、死と向き合う弔いの場であり、そこから生を見出す祈りの場だ。

本展でも柴川の遊び要素をふんだんに盛り込んではいるものの、先述のごとく、その核心部分においては死の気配を色濃く残すよう腐心したつもりである。ただし死の気配一色に染めたかったわけではない。抽象的な言い回しになるが、ピラミッドの核心部分はこの世とあの世の中間領域として生者と死者とが等価に交感しえるような場にしたかった。死の世界のギリギリの縁から立ち上がってくる微かな生の気配を掴み取る。エロスの果てにあるタナトスを怖れながら生きるよりも、タナトスの果てにあるエロスにこそ小さな希望を見出したい。私たちが住むこの世界は結構えげつなく矛盾に満ちたものだが、その中にあってもなお、さして悪くない部分を私たちはそれなりに築けるはずだ。

＊　＊　＊

さて、本展のテーマはなぜ「ピラミッド」である必要があったのか？それは九州芸文館の三角空間を積極的に活用するためだけではない。

記録集『ちくごアートファーム計画―筑後の風土と芸術文化』にも記した通り[5]、企画者の関心はもともと筑後エリアの豊かな地域資源である「里山」「自然」「食」等であった。しかしながら2013年4月に開館した九州芸文館とその最寄駅JR筑後船小屋駅を擁する筑後広域公園は、現地の自然環境を大きく改変した上で整えられた目新しい環境である。この場でスローライフやエコロジーを声高に謳ったところで強い説得力を持ち得るとは思えなかった。さらに本プロジェクトの事業主体が福岡県であり、その運営予算が文化庁の補助金から賄われている状況を考えるならば、本展では「権力と芸術の関わり」を実直に扱う方が企画としては矛盾が少ないように思われた。

日本の歴史を振り返るならば、縄文・弥生時代にも土器や青銅器等ムラ単位での小規模なモノ作りはあったが、古墳時代にクニが誕

（5）ちくごアートファーム計画実行委員会、前掲書、2頁および8頁。

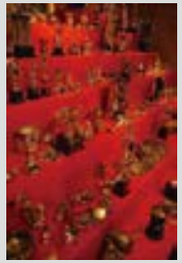
生したことで、それ以降これまでになく組織的かつ大規模なモノ作りが可能となった。古墳である。権力者による芸術の始まりだ。筑後エリアは八女市の岩戸山古墳をはじめ古代の文化財が数多く残る地でもある。一方、ピラミッドもいうまでもなく人類有史初期に強大な権力によって生み出された芸術的な所産だ。2014年の現在、福岡県あるいは文化庁という大きな組織を背景に展開される本企画において、現代美術の力で現代の筑後をいったん化石化した上で、洋の東西の違いや時代の違いを超えて権力が生み出す芸術の起源を探り、今後のあるべき姿について考えることは意味あることと思われた。

さて、本展の核心部分は石室にあたる「2000年後の黄金の間」であるが、その場に祀られるべき権力者は王様でも政治家でもなく、私たち市民一人ひとりであるとの設定をとった。現代の日本が王侯社会でも貴族社会でもなく、選挙によって為政者を決定する民主的な市民社会であることから導いた帰結であるが、はたしてこの民主主義の社会において芸術はどのように可能だろうか。

本展は市民参加型展覧会と銘打ってはいるものの、市民一人ひとりに企画の可否を諮りながら多数決で判断し進めたわけではない。企画内容については美術家およびキュレーターが大きな決定権を握った上で検討を重ね実施した。そこでの市民参加のあり方は当然ながら企画者が概ね想定した範囲内にとどまるべきものであり、企画意図を大きく逸脱する提案や予定調和を崩すような参加を積極的に促すものではない。そのようにして本展においては美術家とキュレーターが展覧会の質を洗練させ、その質を維持する役割を司った。科学の真理が多数決では決まらないのと同様、芸術の質は多数決で決まるものではない。

では政治の場合はどうだろうか。政治の質は誰がどのように判断し、洗練し、維持しうるだろうか。今の仕組みでは政治は原理的には多数決の世界であるから、政治の質を上げていくという場合、有権者全体の質を上げていく必要があるだろう。

ただしここで「質を上げる」という思考あるいは志向に対して、私たちは大いに警戒しておかねばならない。なぜならば質の向上とは必ず洗練を求めるのであり、洗練とは必ず淘汰あるいは排除を伴うからだ。そこには簡単に危うい空気が醸成される。



権力が生み出す芸術の美しさと悍ましさはこの点にある。権力は自らの権力を洗練された形で表象したい。つまり質の高い美を生み出したい。質の高い美を生み出すためには質の低いものを淘汰あるいは排除する必要がある。そこには必ず犠牲が生まれる。美とはそういうものだ。必ず排除と犠牲の上に成り立つ。私たちが芸術の歴史で学ぶものの大半は富と権力を集中させることによって生み出された美である。私たちはその背景にある排除や犠牲も含めて、芸術の持つ煌びやかさ、狂おしさ、禍々しさに無意識のうちに惹かれ、畏れるのだ。これこそが本展の核心「2000年後の黄金の間」に渦巻く美の正体である。

権力を背景とする芸術文化事業における質の洗練をどのように考えるか、私たちはもっと慎重になって良いだろう。『大ドイツ芸術展』も『退廃芸術展』も民主的なプロセスの果てに成立したのだから[6]。

はたして民主主義の市民社会において芸術はどのように可能だろうか。その芸術は美を備えうるだろうか。そしてその美は2000年後にも輝きを保っているだろうか。

（6）ナチズムの文化政策として1937年にミュンヘンで開催された展覧会。参考文献に関楠生『ヒトラーと退廃芸術 〈退廃芸術展〉と〈大ドイツ芸術展〉』（河出書房新社、1992年）、神奈川県立近代美術館ほか編『芸術の危機 ヒトラーと〈頽廃美術〉』（アイメックス・ファインアート、1995年）等。

出品目録｜柴川敏之

2000年後の考古学者の間

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
PLANET DESK（2000年後に発掘された考古学者の机）	1	2014年	ミクストメディア、木机他	150 × 91 × 59
出現 II .40070111（2000年後に発掘された世界地図）	1	2007年	ミクストメディア	16.2 × 8
出現 II .40120612（2000年後に発掘された招き猫）	1	2012年	ミクストメディア	20 × 20 × 25

2000年後の化石の間

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
PLANET SHIP（2000年後に発掘された船）	1	2014年	ミクストメディア、川船	85 × 119 × 425
PLANET ICONS Ⅰ（2000年後に発掘された埴輪〜副葬品）	計10	2014年	ミクストメディア	10.5 × 5.5 × 4.3 〜 38 × 26 × 22
PLANET LINES（2000年後に発掘されたJR九州の遺構）	1	2014年	ミクストメディア	175 × 120 × 2.5
PLANET TRAINS（2000年後に発掘された九州新幹線）	1	2014年	ミクストメディア	8.7 × 85.5 × 7
PLANET TRIANGLES （2000年後に発掘された三角定規〜九州芸文館）	1	2014年	ミクストメディア	23 × 61 × 0.6
出現 II .40120601（2000年後に発掘されたヘリコプター）	1	2012年	ミクストメディア	9.8 × 22 × 7.5
出現 II .40141111（2000年後に発掘された九州）	1	2014年	ミクストメディア	8.5 × 6 × 1.5
出現 II .40120621（2000年後に発掘された地球儀）	1	2012年	ミクストメディア	17 × 10 × 10
出現 II .40120716（2000年後に発掘されたトロフィー）	1	2012年	ミクストメディア	78.5 × 13 × 11.7

2000年後のお宝の間

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
PLANET MASKS（2000年後に発掘されたお面）	計3	2014年	ミクストメディア、川船	17 × 19 × 6、25 × 18 × 6、 17 × 23 × 6
PLANET BOX Ⅰ（2000年後に発掘された副葬品）	計26	2014年	ミクストメディア	4 × 2.5 × 2 〜 11.8 × 10.8 × 10.8
PLANET BOX Ⅱ（2000年後に発掘された副葬品）	計26	2014年	ミクストメディア	6 × 4 × 2 〜 14.5 × 12.5 × 4.5
PLANET ICONS Ⅱ（2000年後に発掘された埴輪〜副葬品）	計8	2014年	ミクストメディア	7.5 × 7.5 × 7.5 〜 32.8 × 20.5 × 12
PLANET ICONS Ⅲ（2000年後に発掘された埴輪〜副葬品）	計9	2014年	ミクストメディア	2.3 × 6 × 2.2 〜 61 × 36 × 19
PLANET ICONS Ⅳ（2000年後に発掘された埴輪〜人形）	計12	2014年	ミクストメディア	5.2 × 3.7 × 3.3 〜 12.8 × 9 × 7.5
出現 II .40040919（2000年後に発掘されたトロフィー）	1	2004年	ミクストメディア	43 × 11.5 × 8.5
出現 II .40141014（2000年後に発掘された絵画：青木繁）	1	2014年	ミクストメディア	46.5 × 37 × 6.5
出現 II .40141015（2000年後に発掘された絵画：坂本繁二郎）	1	2014年	ミクストメディア	51.5 × 57 × 7
出現 II .40041112（2000年後に発掘された絵画：ピカソ）	1	2004年	ミクストメディア	61 × 52 × 8
出現 II .40041113（2000年後に発掘された絵画：モネ）	1	2004年	ミクストメディア	84 × 96 × 10
出現 II .40101120（2000年後に発掘された携帯電話）	1	2010年	ミクストメディア	14 × 4 × 2
出現 II .40130120（2000年後に発掘された飛行機）	1	2013年	ミクストメディア	18.5 × 16 × 4

2000年後の闇の間

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
出現 II .40141015（2000年後に発掘されたメトロノーム）	1	2014年	ミクストメディア	20 × 11 × 10.3
出現 II .40141130（2000年後に発掘された骸骨）	1	2014年	ミクストメディア	13 × 12 × 17

2000年後の黄金の間

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
PLANET ALTAR（2000年後に発掘された祭壇：金）	1	2014年	ミクストメディア、 仏壇他	300 × 260 × 200
PLANET MURAL（2000年後に発掘された壁画：朱）	1	2014年	帆布、朱インク、顔料	515 × 270 × 295

2000年後の食の間

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
PLANET STARS（2000年後に発掘された地層〜ななつ星）	計7	2014年	ミクストメディア	10 × 6.5 × 3.5 〜 13 × 7 × 7

サテライト展示1——近松岩吉商店 室岡店

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
出現 II .40120611（2000年後に発掘された招き猫）	1	2012年	ミクストメディア	20 × 20 × 25
出現 II .40130111（2000年後に発掘されたメトロノーム）	1	2013年	ミクストメディア	20 × 11 × 10.3
月のある地我像〜記憶のほとり	1	1992年	油彩、ミクストメディア	162 × 130 × 6

サテライト展示2——赤坂飴本舗

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
出現 II .40140819（2000年後に発掘された招き猫）	1	2012年	ミクストメディア	15.5 × 12 × 8
出現 II .40030408（2000年後に発掘されたキュービー人形）	1	2003年	ミクストメディア	19.2 × 12 × 6.8

サテライト展示3——うなぎの寝床

《作品名》	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
出現 II .40140820（2000年後に発掘された招き猫）	1	2014年	ミクストメディア	15.5 × 12 × 8
出現 II .40130112（2000年後に発掘されたメトロノーム）	1	2013年	ミクストメディア	20 × 11 × 10.3

出品目録｜借用資料

2000年後のお宝の間

所蔵先｜福岡県立美術館

作者	作品名	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
高島野十郎	洋梨とブドウ	1	1941年	油彩・画布	40.9 × 53
坂本繁二郎	能面	1	1955年	油彩・画布	33.5 × 49.5
舟越保武	原の城	1	1964年	ブロンズ	高32
冨永朝堂	卑弥呼	1	1971年	ブロンズ	高64.5
豊福知徳	継続	1	1973年	ブロンズ	67.2 × 68.7
豊福知徳	構成	1	1962-73年	木彫・着色	56.2 × 57.2

所蔵先｜岩戸山歴史資料館（現：岩戸山歴史文化交流館いわいの郷）

名称	出土遺跡	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
ミニチュア土器	八女東部第２地区	1	弥生時代後期	土器	約5 × 5
ミニチュア土器	八女東部第２地区	1	弥生時代後期	土器	約5 × 5
平縁四乳文鏡	釘崎３号古墳	1	古墳時代後期	銅	径約6
壺形土器	室岡山ノ上遺跡	1	弥生時代前期	土器	約15 × 14
壺形土器	室岡北小路遺跡1号溝	1	弥生時代前期	土器	約8 × 8
石鏃（せきぞく）	立山山遺跡	7	縄文時代後期	石	各約1 ～ 2
勾玉	城の谷古墳	3	古墳時代前期	石（翡翠）	各約2 ～ 3
ガラス玉	城の谷古墳	1	古墳時代前期	ガラス	約5 × 4
碧玉製棗玉（なつめだま）	立山山23号墳	1	古墳時代後期	石（碧玉）	約14 × 3
銅地銀張耳環（じかん）	童男山（どうなんざん）11号古墳	2	古墳時代後期	銅、銀	約3
鉄鏃（てつぞく）	童男山11号古墳	2	古墳時代後期	鉄	約7 ～ 10
銅地金張耳環（じかん）	伝　岩戸山４号古墳	1	古墳時代後期	銅、金	約2
石人頭部	岩戸山古墳別区	1	古墳時代後期	石	約30
人物埴輪（入墨をした顔）	立山山13号墳	1	古墳時代後期	土器	約20 × 15
刀子（とうす）	立山山古墳群	3	古墳時代後期	鉄	約5 ～ 10 × 1
鋏（かすがい）（復元後）	立山山13号墳	1	古墳時代後期	鉄	約10 × 3
鉄製鞍金具（くらかなぐ）	東館遺跡６号古墳	4	古墳時代後期	鉄	各約5 × 5
銅製鈒具（かこ）	東館遺跡６号古墳	1	古墳時代後期	銅	約3角
挂甲小札（けいこうこざね）	立山山８号墳	8	古墳時代後期	鉄	各約5 × 1.5
弓付属金具	立山山８号墳	6	古墳時代後期	鉄	約3 × 0.5
鞍（しおで）	立山山13号墳	1	古墳時代後期	鉄	約5 × 5 × 1
留金具（とめかなぐ）	立山山13号墳	2	古墳時代後期	鉄	約3 × 2 × 1
辻金具（つじかなぐ）	釘崎３号古墳	2	古墳時代後期	鉄	約5 × 5
鉄鏃（てつぞく）	立山山古墳群	4	古墳時代後期	鉄	約7 ～ 8 × 1

所蔵先｜八女民俗資料館

名称	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
箱雛（2体1組）	各1	昭和初期	布、木	51 × 41.5 × 23.5
燈籠人形（横使い人形）骨組み	1	江戸末期	木、紐、針金	70 × 33 × 31

所蔵先｜八女伝統工芸館

名称	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
石灯篭 狛犬（２体1組）	各1	2008年頃	凝灰岩	各32 × 14 × 20

所蔵先｜赤坂飴本舗

名称	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
赤坂人形［はと笛、招き猫、恵比寿・大黒他］	計11	1970年代	土、陶土、食紅	5.5 × 5 × 8.5 ～ 14 × 9 × 4

会場入口

所蔵先｜羽犬塚商店街協同組合

名称	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
羽犬塚恵毘須像［650年祭の時に作られたもの］	1	2006年	土・着色	16.5 × 16 × 9

2000年後の化石の間

所蔵先｜八女民俗資料館

名称	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
川船	1	昭和初期	木、釘	38 × 119 × 425

2000年後の闇の間

所蔵先｜福岡県立美術館

作者	作品名	点数	制作年	材質	大きさ（cm）
高島野十郎	蝋燭	1	1912-25年	油彩・板	22.7 × 15.6

柴川敏之の制作風景（撮影：納所和正）

柴川敏之 SHIBAKAWA Toshiyuki｜略歴

*印：図録、記録集、カタログを発行

1966 アルベルト・ジャコメッティの命日（1966.1.11）に大阪府で生まれる｜現在、岡山市在住、就実短期大学教授
1991 広島大学大学院修了
1993 草戸千軒町遺跡（広島県福山市）と出会い「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに制作を開始
1997 文部省在外研究員としてイタリアに滞在し、フレスコ画・ポンペイ遺跡等を調査研究（ミラノ国立ブレラ美術学校）
2006 エネルギア美術賞受賞／財団法人エネルギア文化・スポーツ財団

主な個展・プロジェクト

2015 PLANET MUSEUM：柴川敏之展｜2000年後的美術館／ Taipei World Trade Center（台湾）*［ART TAIPEI 2015］
2014 PLANET PYRAMID：柴川敏之展｜2000年後のピラミッド／九州芸文館（福岡）*［ちくごアートファーム計画］
2013 PLANET TACTILE：柴川敏之｜2000年後の今に触れる☆プロジェクト／川崎市市民ミュージアム（神奈川）*
2013 PLANET SCHOOL：柴川敏之×てんとうむしプロジェクト｜2000年後の小学校／京都芸術センター（京都）*
2012 PLANET SCROLL：柴川敏之展｜2000年後の化石絵巻／秋吉台国際芸術村（山口）*
2010 大原美術館の80歳をお祝いしよう！プロジェクト／大原美術館（岡山）*
2010 PLANET ANTIQUES：2000年後の骨董市｜柴川敏之展／ YOD Gallery（大阪）*
2009 PLANET WALL：柴川敏之展 /a piece of space APS（東京）*
2008 PLANET SANNAI：柴川敏之｜2000年後の未来遺跡｜三内まるごとミュージアム／青森県立美術館、三内丸山遺跡（青森）*
2008 PLANET MUSEUM☆PROJECT：柴川敏之｜2000年後の美術館☆プロジェクト／高知県立美術館、他17施設（高知）*
2007 TRAVELER：縄文土器と美術家 柴川敏之の世界／京都造形芸術大学芸術館（京都）*
2007 PLANET CAPSULE：柴川敏之｜2000年後のタイムカプセル／鶴岡アートフォーラム（山形）
2006 PLANET STREET：柴川敏之｜2000年後に発掘された〈駅〜まち〜美術館〉／佐倉市立美術館、栄町、京成佐倉駅（千葉）
2006 時のかけら：柴川敏之展｜2000年後のミュージアム〜縄文と現代の行方／辰野美術館（長野）
2006 PLANET DRAGON：龍の道：2000年後の龍の行方／千光寺道、尾道市商店街、尾道市内小学校他（広島）
2006 PLANET PIECES：柴川敏之展／a piece of space APS、巷房階段下他（東京）*
2005 未来美術館へ行こう！柴川敏之展：PLANET MUSEUM OF ART/TWO ROOMS／奈義町現代美術館（岡山）*
2004 アート・ネットワーク柴川敏之展：PLANET MUSEUM OF ART/ONE ROOM／ふくやま美術館（広島）*
2003 2000年後の冒険ミュージアム“川に埋もれた伝説の町〜草戸千軒”と“現代の美術”展／広島県立歴史博物館（広島）*
2001 PLANET CIRCLE：今日の作家シリーズ 柴川敏之展／大阪府立現代美術センター（大阪）*
1999 PLANET GARDEN：柴川敏之展｜惑星の箱庭／しぶや美術館（広島）
1999 41世紀からのメッセージ：美術の時間 vol.6 柴川敏之展／デビットホール（岡山）

主なグループ展

2016 岡崎和郎×柴川敏之｜未来の化石・化石の未来／倉敷市立美術館（岡山）［「発掘された過去・現在・未来」展］
2016 美作三湯芸術温度｜2000年後の温泉ミュージアム／湯郷温泉（和モダンなお宿かつらぎ、DOT CAFE）（岡山）*
2016 Bazaar Art Jakarta 2016／ The Ritz-Carlton, Pacific Place（ジャカルタ）
2015 ART TAIPEI 2015 台北國際藝術博覽會／ Taipei World Trade Center（台湾）（同：2014）
2015 ABOUT ART EXPO MALAYSIA PLUS／ MECC（マレーシア）
2015 ART OSAKA 2012／ホテルグランヴィア大阪（大阪）（同：2014, 2013, 2012, 2011, 2010）
2015 アート・オブ・メモリー 記憶をめぐる4つのレシピ／北九州市立美術館（福岡）*
2014 NEW CITY ART FAIR／ hpgrp GALLERY NEW YORK（アメリカ）（同：2012）
2014 Affordable Art Fair Brussels／ Tour & Taxis（ベルギー）
2014 Collection Gilles Balmet／ ÉSAD de Grenoble（フランス）*
2013 岡部昌生・柴川敏之展〜未来の考古学／ギャラリーてんぐスクエア（広島）*［アート・アーチ・ひろしま 2013］
2013 ようこそ鞆へ！遊ぼうよパラダイス／鞆の津ミュージアム（広島）*
2012 始発電車を待ちながら 東京駅と鉄道をめぐる現代アート 9つの物語／東京ステーションギャラリー（東京）*
2012 岡山芸術回廊 特別展「つながる景色」／岡山後楽園（岡山）*
2012 Spoon Art Fair／ Grand Hyatt Hong Kong（香港）
2011 夏休み・みんなで楽しむ展覧会『いつの人？ どこの人？ どんな人？』／大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室（大阪）*
2010 ART GWANGJU 2010／ KDJ Convention Center（韓国）
2009 SUMOAURA（相撲オーラ）展／十和田市現代美術館（青森）
2007 おもちゃの今〜未来展 藤浩志と柴川敏之／篠山チルドレンズミュージアム、歴史美術館、丹波古陶館他（兵庫）
2006 TAMA VIVANT 2006「今、リズムが重なる」／多摩美術大学（東京）、みなとみらい駅（横浜）*
2006 Art in 福寿会館／福寿会館（広島）*［ふくやま美術館企画］
2006 さわって楽しむ現代美術展／浜田市世界こども美術館（島根）*｜印象派から広がる美術の世界／同館（島根）*
2006 現代の造形 -Life & Art-「酔いのかたち」／東広島市立美術館（広島）*
2005 ARTOM60 現代美術展 被爆60年に向けて／旧日本銀行広島支店（広島）*
2005 VOCA展「現代美術の展望―新しい平面の作家たち」／上野の森美術館（東京）*
2002 ヒロシマアートドキュメント 2002／旧日本銀行広島支店（広島）*
2000 龍の國・尾道〜その象徴と造形／尾道市立美術館（広島）*

主なワークショップ

2016　2000年後のブリッジ☆プロジェクト／リバーウォーク北九州、小倉井筒屋他（福岡）［北九州市立美術館アウトリーチ事業］
2014　2000年後へタイムスリップ!?「いま」のモノを化石にしよう！／北九州市立美術館（福岡）［サマーアートスクール］
2013　2000年後の今を発掘しよう！／川崎市市民ミュージアム、川崎市立田島養護学校（神奈川）*
2013　2000年後のひろしまを発掘しよう！／広島県立美術館（広島）*［アート・アーチ・ひろしま 2013 サテライト企画］
2012　電車に乗ってタイムスリップ !?　2000年後の紙の化石を作ろう！/ 青梅鉄道公園（東京）
2010　2000年後の化石を作ろう！/ John Muir School（アメリカ）
2009　2000年後の音の化石 / 東京都荒川区立尾久宮前小学校（東京）［学校への芸術家派遣事業］
2008　2000年後の壁画をつくろう☆ピカソに挑戦！/ 呉市立美術館（広島）［ピカソ展］
2007　2000年後の美術館をつくろう!/七つ梅酒遺跡（埼玉）［深谷オンセンプロジェクト 2007「ふかやであそぼ!」］
2007　2000年後の部屋をつくろう！/ 伊丹市立美術館（兵庫）*［夏休み企画「子どもと造形」］
2007　2000年後のステンドグラスをつくろう！―子どもたちと丹下健三の建築と柴川敏之のコラボレーション / 倉敷市立美術館（岡山）*
2006　2000年後の大蛇（おろち）をつくろう！/ 浜田市世界こども美術館（島根）*［こども美術館まつり 2006］
2005　2000年後の学校を紙にうつそう！/ 東京都北区西ヶ原小学校（東京）［ニシガハラズコウスクール チャレンジプログラム］
2005　2000年後の風景をつくろう!!/ 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）［風景遊歩 sight-cruising］
2003　現代を版画にしよう！―ミロに挑戦 / 成羽町美術館（岡山）［版画の魅力 7 人の巨匠展 ～ゴヤからミロまで］
2003　現代を版画にしよう！―棟方志功に挑戦 / ひろしま美術館（広島）［生誕 100 年記念 棟方志功展］

その他

2011　講演「2000年後のアートプロジェクト」／ Southern Oregon University（アメリカ）
2009　講演「2000年後の美術館・博物館プロジェクト」／北海道大学総合博物館（北海道）
2008　シンポジウム「2000年後のまちの行方～地域文化を活かしたアートプロジェクト～」／辰野美術館（長野）
2006　講演「2000年後に発掘された現代の遺跡」／多摩美術大学（東京）
2006　映画『ちゃんこ』：脚本・美術協力、題字デザイン、出演他／カンヌ映画祭、ベルリン映画祭他*　＊制作：ドリームワン

http://www.planetstudio41.com

2013｜鞆の津ミュージアムでの
インスタレーション

2013｜京都芸術センターでの
ワークショップ作品（撮影：大島拓也）

2012｜岡山後楽園の八橋での
インスタレーション

2012｜東京ステーションギャラリー
での展示（撮影：末正真礼生）

2011｜大阪市立近代美術館（仮称）
心斎橋展示室でのインスタレーション

2008｜青森県立美術館での
インスタレーション（撮影:末正真礼生）

2006｜伊丹市立美術館での
ワークショップ作品

2001｜大阪府立現代美術センターでの
インスタレーション（撮影：末正真礼生）

2010｜大原美術館での
アートプロジェクト（撮影：小野 博）

2009｜十和田市現代美術館での
インスタレーション

2003｜広島県立歴史博物館での
ワークショップ

1999｜デビットホールでの
インスタレーション（撮影:末正真礼生）

主な文献

新聞

江見 肇　「創造の現場から：現代文明を化石で表現」：『山陽新聞』、1999.11.28
大西若人　「展評：『現代』が埋もれた遺跡」：『朝日新聞』、2000.1.20
田原直樹　「21世紀人：遺跡としての現代～ 2000年後から行く末考える」：『中国新聞』、2000.8.23
加藤義夫　「人類の誤算への警告」：『朝日新聞』、2004.5.15
堀 浩哉　「すべてが潰れ、焼きつくされ、その灰の中からこそ新しい芽が出てくる③」：『新美術新聞』、2005.12.11・21
山盛英司　「ナビゲーター：2000年後から見る今」：『朝日新聞』、2006.12.19
手塚さや香　「極めたい：未来の視点で現代掘り出す」：『毎日新聞』、2010.7.14
関 優子　「廃材から『原初』の胎動～モノの意義、アートで再考」：『日本経済新聞』、2010.7.27
岡田智美　「時空超えるオブジェ～美術家柴川敏之さん、岡崎和郎作品とコラボ展」：『山陽新聞』、2016.6.9

雑誌

中村共子　「美術と歴史をつなぐ新たな試み」：『美術手帖』、美術出版社、2003年11月号、pp.220-221
柳沢秀行　「ジャーナルポケット『2000年後の冒険ミュージアム』」：『月刊ミュゼ』vol.61、アム・プロモーション、2003.11.15、pp.4-5
中山ゆかり　「2000年後の冒険ミュージアムをドキュメント」：『DOME』vol.71、日本文教出版、2003.12.1、pp.4-13
山本育夫　「語ローグ15　2000年後の冒険ミュージアム」：『DOME』vol.81、日本文教出版、2005.8.1、裏表紙
山下治子　「映画『ちゃんこ』と美術館」：『月刊ミュゼ』vol.75、アム・プロモーション、2006.3.15、p.37
永山智子　「まちを舞台にするミュージアム」：『月刊ミュゼ』vol.81、アム・プロモーション、2007.7.25、pp.10-16
竹邨 章　「未来の化石に願いをこめて」：『日経マガジン』、日本経済新聞社、2008年8月号、pp.18-19
山下里加　「SCOPE ｜ 芸術文化・スポーツ・自然を介し人々が交流する総合拠点」：『地域創造』、2015年 vol.37、地域創造、pp.60-63

カタログ・パンフレット等

柳沢秀行　「41世紀からのメッセージ｜柴川敏之展」：『DAVID HALL 通信』vol.8、1999.5.25
宇根元 了　「惑星のある地我像 -Dragon Well-」：『龍の國・尾道～その象徴と造形：図録』、尾道市立美術館、2000.3、pp.76-77
小口斉子　「PLANET CIRCLE」：『今日の作家シリーズ｜ PLANET CIRCLE ｜柴川敏之展』、大阪府立現代美術センター、2001.7、p.3
岸本和明　「『絵画』の可能性－未来の視点で現代社会を考察」：『VOCA 2005：図録』、上野の森美術館、2005.3、pp.42-43
柳沢秀行　「イマジネーション」：『2000年後の冒険ミュージアム：記録集』、2005.3.31、pp.14-19
倉林 靖　「遠い視線」：『PLANET PIECES：記録パンフレット』、a piece of work APS、2006.10.31、p.5
岸本和明　「2000年後の未来を現代人の目線で考察」：『未来美術館へ行こう！柴川敏之展：記録集』、奈義町現代美術館、2007.1.11、pp.4-5
佐々木千恵　「PLANET GLASS」：『2000年後のステンドグラス：記録パンフレット』、倉敷市立美術館、2008.3.31、p.5
多 忠秋　「演出家・柴川敏之による『子どもと造形』」：『2000年後の部屋：記録パンフレット』、伊丹市立美術館、2008.3.31、p.5
岡本康明　「縄文土器と美術家 柴川敏之の世界」：『TRAVELER：記録集』、京都造形芸術大学芸術教育資格支援センター、2008.7.31、pp.4-5
河村章代　「2000年後の思い出のため…」：『2000年後の美術館☆プロジェクト：記録集』、高知県立美術館、2009.3.20、pp.8-9、pp.118-119
松本教仁　「大容量高速ネットワークとしての柴川敏之さん」：『2000年後の美術館☆プロジェクト：記録集』、高知県立美術館、2009.3.20、p.119
堀越聡子　「41世紀の三内丸山人に引き継ぐもの」：『2000年後の未来遺跡｜三内まるごとミュージアム：記録集』、青森県立美術館、2009.3.31、p.5
鬼本佳代子　「龍が結んだ人・街・美術館」：『大原美術館の80歳をお祝いしよう！プロジェクト：記録集』、大原美術館、2010.3.10、pp.44-45
堀切正人　「化石の虚実」：『PLANET WALL：記録パンフレット』、a piece of work APS、2011.7.30、p.5
山中俊広　「絡み合った時間軸を読み取る」：『PLANET ANTIQUES：記録パンフレット』、YOD Gallery、2011.7.30、p.5
冨田 章　「東京駅と鉄道をめぐる現代アート９つの物語｜時の経過」：『始発電車を待ちながら：図録』、東京ステーションギャラリー、2012.10.1、pp.16-24
藤田瑞穂　「2000年後につながる『笑顔』」：『2000年後の小学校：記録集』、京都芸術センター、2014.3.31、pp.98-101
森口まどか　「『2000年後の小学校』展となるまでに」：『2000年後の小学校：記録集』、京都芸術センター、2014.3.31、p.95
三井知行　「遷都3219年祭の京都」：『2000年後の小学校：記録集』、京都芸術センター、2014.3.31、pp.96
安河内宏法　「星の光、未来の星座」：『2000年後の小学校：記録集』、京都芸術センター、2014.3.31、pp.97
山下寿水　「過去の痕、後の未来」：『岡部昌生・柴川敏之展～未来の考古学：記録集』、アート・アーチひろしま2013、2014.3.31、p.11-12
清田幸枝　「『過去・現在・未来』をつなぐ仕掛け」：『アート・オブ・メモリー』、北九州市立美術館、2015.1.20、pp.24-25

雑誌・カタログ・パンフレット等／自筆

柴川敏之　「2000年後の冒険ミュージアム 誕生」：『2000年後の冒険ミュージアム：記録集』、2005.3.31、pp.14-19
柴川敏之　「41世紀の美術館～その光と影」：『2000年後の美術館☆プロジェクト：記録集』、高知県立美術館、2009.3.20、pp.6-7
柴川敏之　「41世紀の行方～未来遺跡からのメッセージ」：『2000年後の未来遺跡｜三内まるごとミュージアム：記録集』、青森県立美術館、2009.3.31、p.4
柴川敏之　「時と雑誌と私」：時をめくる雑誌『fold』創刊号、東京大学コマプレス、2009.7.25、Section 01 p.4
柴川敏之　「2000年後のパラダイス☆鞆の浦」：『ようこそ鞆へ！遊ぼうよパラダイス：記録集』、鞆の津ミュージアム、2013.8.17、pp.10-11
柴川敏之　「『2000年後の小学校』の行方」：『2000年後の小学校：記録集』、京都芸術センター、2014.3.31、pp.8-11

ウェブサイト

柳沢秀行　「学芸員レポート：2000年後の冒険ミュージアム」：『artscape』、2003
藤田千彩　「people：柴川敏之インタビュー」：『PEELER』、2005
横永匡史　「『形あるもの』と『形ないもの』を見つめて」：『PEELER』、2005　｜「重なり合う世界、そのための仕掛け」：『PEELER』、2007
日沼禎子　「相撲王国・十和田（青森）で出会う心技体の美 ―「SUMOAURA（相撲オーラ）」展」：『artscape』、2009
友利 香　「くゆり合う時間軸のスパイラル」：『PEELER』、2012

その他　中学校美術科教科書『美術１｜美術との出会い』、日本文教出版、2012、p.35

『2000年後のピラミッド｜柴川敏之展』

活動記録｜ タイムドキュメント参照（p.19）

2013年11月21日
下見｜打合せ

2014年8月28日－
9月1日
打合せ｜挨拶回り｜
リサーチ｜クロストーク

2014年10月4日－6日
打合せ｜挨拶回り｜
リサーチ｜モノ選び

2014年11月26日－
12月1日
打合せ｜挨拶回り｜リサーチ｜
モノ選び｜プレ・ワークショップ

2014年12月1日－20日
衣装づくり

2014年12月1日－
2015年2月15日
金色のトロフィー・
オブジェの募集

2014年12月20日－
22日
展覧会準備｜会場設営

2014年12月23日
展覧会初日｜アーティス
トトーク

2014年12月24日
サテライト展示の
展示作業

2014年12月27日、
2015年1月17日、24日、31
日、2月7日、14日
学芸員によるギャラリー
トーク

2015年1月10日
ワークショップ｜
ギャラリートーク

2015年1月11日
ミニ・ワークショップ

2015年2月15日
展覧会最終日｜
ギャラリートーク

2014年12月23日－
2015年2月15日
会期中スナップ

2015年2月16日－17日
撤去作業｜搬出

2000年後の世界は、
どうなっていると思いますか？
—— 柴川敏之

What do you think the world
would become after 2000 years?
—— SHIBAKAWA Toshiyuki

謝辞

本展覧会の開催にあたり、多大なご協力を賜りました下記の関係者・
関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。（敬称略、順不同）

福岡県立筑後特別支援学校
福岡県立八女工業高等高校
香蘭女子短期大学
就実短期大学
北九州市立美術館
岩戸山歴史資料館
八女民俗資料館
一般財団法人八女伝統工芸館
羽犬塚商店街協同組合
株式会社 近松岩吉商店
赤坂飴本舗
うなぎの寝床
CRAZY AUTO
金色のモノやトロフィーをご提供いただいた皆様

2000年後のピラミッド｜柴川敏之展

PLANET PYRAMID｜SHIBAKAWA Toshiyuki Exhibition

日時｜2014年12月23日（火・祝）－2015年2月15日（日）
会場｜九州芸文館
主催｜ちくごアートファーム計画実行委員会
（福岡県、福岡県教育委員会、福岡県立美術館、筑後市、筑後市教育委員会、八女市、八女市教育委員会、筑後商工会議所、
NPO法人芸術の森デザイン会議、「ちくごJR芸術の郷」事業団）
共催｜西日本新聞社、九州芸文館美術展実行委員会
助成｜公益財団法人福岡文化財団
招聘アーティスト｜柴川敏之
企画｜花田伸一（キュレーター）

文化庁「平成26年度 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」

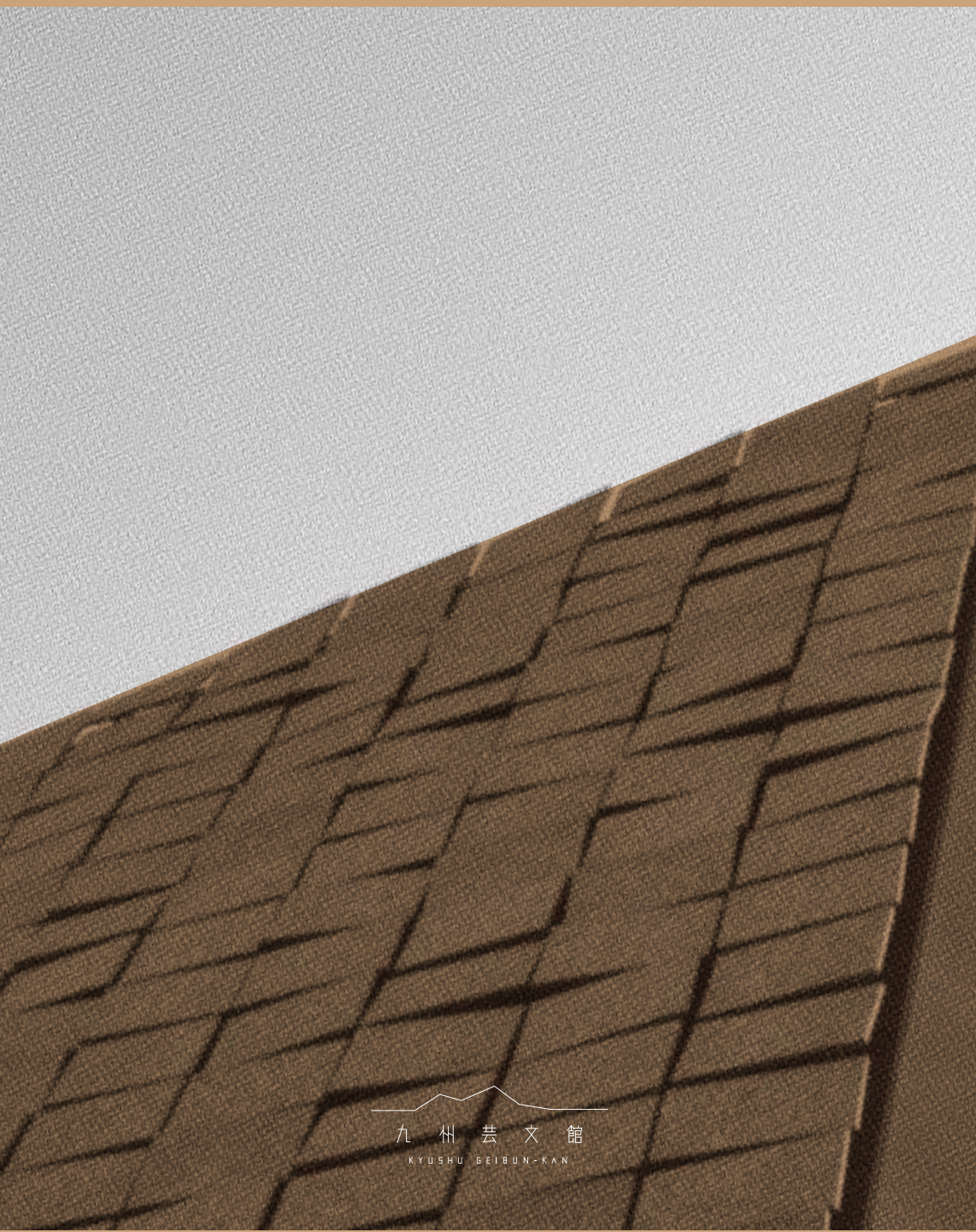
記録集

編集｜花田伸一　柴川敏之
執筆｜柴川敏之　花田伸一　関岡絵梨花　矢追愛弓　三満田 巧　長尾萌佳
寄稿｜西本匡伸　大塚恵治　臼井敬太郎　宮本初音　鬼本佳代子　中村共子　山下里加
翻訳｜Sandra J. Holstein
デザイン｜仲村健太郎
写真｜末正真礼生　柴川敏之　花田伸一
発行日｜2017年3月31日

発行｜ちくごアートファーム計画実行委員会
〒812-8577　福岡市博多区東公園7-7
福岡県新社会推進部県民文化スポーツ課
Tel: 092-643-3382　Fax: 092-643-3347

［本文中の個人名、所属、肩書等は展覧会開催当時］

不許複製・禁無断転載
© 2017 Chikugo Art Farm Project Committee
All rights reserved


九州芸文館
KYUSHU GEIBUN-KAN